

新 年 號

目 次

阿含の人身觀(上).....	本多日生
更賜壽命.....	酒井目慎
破邪顯正(其三).....	磯部滿
日蓮上人の御迎春.....	笹木欣爾
開目鈔講話(第四講).....	小林一郎
記事	

○本部圖報 ○各地教信
○圖費誌料寄附維持費領收

第 四 十 二 年 一 月 號

統

法
人
團

統

團
發
行

財團 統一團趣意

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髄ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サザル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法思國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法勳

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ウテ重大ナル任務ヲ執行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髄ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ 教旨ノ正明 研學ノ調達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラシム事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團略則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髄ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方テ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方テ贊助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ贈出セラル、方テ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本論ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

阿含の人身觀

故大僧正 本多日生

本日は『阿含の人身觀』と題して『阿含經』に説かれて居るところの吾々人身に就ての教を御紹介しようと思ひますが、それに就て先づ序言として三つの大切な事柄を申述べたいと思ふ。

一、佛 教 小 觀

先づ第一に『佛教小觀』と題して、佛教の全體に關して簡單にお話をして置きたいと思ふ。佛教と一口に申しますけれども、釋迦如來が五十年の長きに亘つて様々に説教をせられたその全體を纏めてこれを結集し、これを纏めて貝多羅葉に書き記し、後に支那に傳つて漢譯大藏經になつて、七千餘卷の一切經と稱するものが百濟王の手を経て我國に貢獻せられて、今尙それ等の經々は全部一冊も破本無く我國に存在して居る次第である。その漢譯大藏經の外に現在西藏或は錫蘭、印度に、貝多羅葉としてそれ以外の經が多少は残つて居ること、思はれるのでありますけれども、大體は漢譯大藏經が先づ佛教を代表

するところの完備した經典となつて居るのである。

ところがその漢譯大藏經だけに就て考へても七千餘卷の經々と稱するのであるから、それを調べるといふことはなかく困難なことである。一通り讀むにしても、七千卷の經卷を讀破するといふことは容易なことではないから、古來一切經を讀んだといふ人が算へる程しか無いのである、一通りそれを讀むだけが容易なことではない。讀んだ人はあるけれども、それに就て纏つた意見を書き記して後の人が一切經を見る便宜に供したる人は一人も無いのである。又後から見るとは何の頼りも無くその一切經の澤山のお經の中に飛込んで行く譯である。それ故に先の人々がそれを讀んでどれだけの事を發見し、又果してその全部を讀んだかどうかといふことは何もわからない、讀んだと言へば讀んだやうなもの、一方はまるで知らないものであるから、「俺は大藏經を讀んだ」と言はれれば「さうですか」と言ふより仕方がない譯であつて、一向に讀んだ讀まぬといふことの區別もはつきりせぬ位なことである。たゞ支那の明の最初に出た智旭といふ坊さんが「閱藏知津」といふものを書いて居る、これは卷數は四十卷もあるが、併しその一卷といふものは極く薄つべらなもので、昔の木版であるから、四十卷とは言ふけれども今日の活版印刷の本にすれば三冊ぐらゐなものに纏ると思ふ。お經の表題若くはその中にある品の題號だけを列べても二冊や三冊の枚數になる一切經である、大藏目錄といふものを御覽になれば、それだけでも二冊あるのであるから「閱藏知津」が四十卷あるといふことを聞くと、餘程能く調べて爲になるこ

とが大分書いてあるだらうと遠慮せられるけれども、實際内容に入つて見ると大して參考にもならない位のものであつて、先づ謂はゞ本當に今日の佛敎研究者の爲には大した價値を認めることは出来ない。さア無いよりはましといふ位のところである。併しその「閱藏知津」を書くだけに智旭法師が努力した事柄は容易なものではない、前後十八年の歲月を費して漸くそれだけのものを纏めたといふのである、以て大藏經の研究なるものゝ容易ならざることを知るべきである。非常な熱心を以て萬事を抛つて一切經の研究に従事し、その間にいろいろの故障にも出會つて、或る時は火事の爲に一旦拵へた原稿が焼けてしまつたといふやうなこともある、十八年の間にはいろいろの事件があつて、非常な勞苦を積んでこれを完成したといふことが「閱藏知津」の序文に記されて居る。その勞を多とすることに於ては私は少しも異存は無いけれども、併しその内容はそれだけ位しか無いのである。日本の學者には一人も大藏經に就て何等の研究も發表して居るものはないといふ有様である。

さういふ譯であるからその他の宜い加減な坊さんが言ひ居ることなどは、何處的に言ひ居るのか、丁度東京を見物に來た人間が東京へは入らないで品川ぐらゐまで來て、東京の様子を見ないで歸つてさうして東京の事を話し居るぐらゐの程度であるから、まだ芝區さへも實際には踏んで居らぬ、京橋日本橋と言つた所が、それが淺草にあるのやら本所にあるのやらまるで知らぬやうな手が話をするのであるから、間違ひが起るのは當然と言はなければならぬ。さうして初めから終ひまで東京の地圖といふも

のを見ないのである、本所區なら本所區といふ一區だけの地圖を見てそれが東京だと思つて居るやうな譯であるから、頗る危ない話で、何を聴いても「いや東京にはそんなものは無い、俺はすっかり地圖を見なければ、そんな所は無い」と言ふ、何ぞ知らん、本所區の地圖だけしか持つて居ないのであるから實に危険なものである。左様な譯で我國には偉い坊さんも澤山出たと言ふけれども、極く學問的に遠慮なく申せば、この千三百年間の日本に於ける佛敎の研究及び宣傳に於ては、多大なる不備多大なる行届かざる點のあることを斷言するに、私は躊躇しないものである。斯様な不備の研究を以て佛法の應用宣傳が完成されるといふことは望んで得べからざることである。又今日に於て時代の要求を考へるに、從來や來つた佛法の研究、應用、宣傳及びそれから起つたところの信仰方法に就ては多大な缺陷がある、これは大に改善を行はなければならぬことは明瞭なことである。

その事柄の中から私は今阿含部に關するお話を申上げて見たいと考へて居るのであるが、それはたゞ佛敎の局部をお話するのではない、佛敎を本當に研究しようとするには阿含より出發しなければならぬ必要があるからして、そこに戻つて申上げる次第である。

大體に於て今までの日本の佛敎研究には今申すやうな缺點があるけれども、その最も著しい所を申せば、阿含を捨て、佛敎を研究し、且つ應用したといふことに於て根本の間違ひがある譯である。それはどういふ譯であるかといふと、阿含といふものが佛敎に於て最も人生生活の事實に觸れて説かれたものである。先づ一方から申せば阿含が眞の佛敎、根本佛敎、原始佛敎、それが事實の佛敎であつて、或る學者から言つたならば餘はだん／＼後に附加へた佛敎であるといふ説さへもあるのである。私はさうまでは無論斷定をしないけれども、先づ世界の學界から言へば阿含が最も信頼すべきもので、大乘諸經の中にはその信用は阿含に比しては軽いもの、多々あるといふことは世界の學界の定論である。それ程重要な阿含といふものを日本の佛敎は最初から顧みないで進んだといふことは、そこに多大な缺陷がある譯である。

のみならず事實に於て阿含の佛敎は人間生活に即したる敎訓であるから、吾々人生に生活して居るところの日常の人間といふものに觸れて釋迦如來が教を立てられたのである。それ故に總て人生の必要な事柄に就ての敎訓が満ち充ちて居る譯である。大乘諸經となると人生生活からは懸け離れて、特別に高いやうな事柄になるのである、例へば阿彌陀様の阿彌陀經にした所が、死んで行く後の世界は如何といふやうな死後の生活に關する問題に限られて居る、阿彌陀様の四十八の願などと言つて數は四十八もあるけれども、吾々の現在生活に關する誓願といふものは一つも無い、死んでから後の事柄のみに限られて居るのであるから、數は澤山あつても非常に偏つたものである。又例へばお地藏様といふやうなものが有り難いと言つても、それはやはり賽の積で子供の爲にどうするといふことになつて來ると、また子供の出來ないものとか、又は現在生活に於て子供でない者はお地藏様とは縁が無いといふやうなこと

になつてしまふ。さういふやうな教は皆大乘諸經に起るので、阿含に於てはどんな低い場合の話でもさういふ間の抜けたやうなことは決して起つて来ないことなのである、何時も總ての人類が人生の生活を營むに關して離れることの出来ない問題を捉へて釋迦は教を立て居るのである。人間の宗教としてどつちが宜しいか、その點が從來日本佛教家の考が間違つて居ると思ふ。

宗教といふものは、日常生活に關する事などはつまらぬことのやうに言つたけれども、吾々は賽の磧の子供の生活よりは、人生に於ける家庭社會の日常生活に關する教訓の方が最も重大なものであることを思ふ。子供の間には死なない者の爲には賽の磧といふやうなものは全然關係が無いといふことになつてしまふ。又子供のやうな頑是無い者が死んで行くに就ては宗教道德の問題は軽いことである、どう言つて見てもいろはの字もわからない頑是ない子供に就ては、善も悪も有りはしない、そんなものは人生の道德宗教といふことに就てさう多大の考慮を煩すべき必要はないのである。譯のわからぬ者は言うて聽かしてもわからぬ、泥棒してはいかぬと言つたところが、泥棒といふことが何だかわからない善い事をせいと云つてもその善い事といふのがわからない、左様な者を捉へてどうちや斯うちやと言つたところが始まらない話である。さういふ大乘の教義を非常に高いことに考へて、人生の實際生活に關する重大な教訓が満ち充ちて居る阿含を侮辱したといふことは、これはつまり支那から來た思想を帯びて居るのであつて、日本佛教の出發點からしてそこに誤りがあることを今日は覺らなければならぬと思

ふ。最初奈良朝の佛教には、小乘といふ名前の宗旨は三つあつた。けれどもその俱舍宗、成實宗、律宗といふ小乘の三宗は阿含を直接に宣傳したのではないので、俱舍論とか成實論とかいふ論書といふものを根本にして居る、それは小乘阿含に就ての議論葛藤に陥つた理窟を書いたものであつて、釋迦が吾々に與へた實際宗教の教訓ではない。その俱舍論とか成實論とかいふ議論のゴタ／＼から宗旨を立てた俱舍宗、成實宗といふやうなものは、小乘宗とは言ふけれども、小乘阿含の精神を教義に應用して居るものではない。律宗は戒律を非常に重んじてたゞ窮窟な律法を守らんとすることのみをやかましく言ふのであつて、宗教的精神の内部からの感化を以てやつて行くのではない、たゞ形式的に斯ういふことをしてはいかぬ、あゝいふことをしてはいかぬといふ律法をきめて、それを嚴守せしめんとするもので、これ亦阿含の眞の教ではないのである。だから奈良朝にさういふ三つの小乘宗があつたけれども、小乘阿含の本當の精神を宣傳して居るものではない、故に我國には最初より阿含の精神を發揚宣傳して居らぬと斷言するに於ても少しも差支ないのである、名前は小乘の三つの宗旨があつたといふだけで、それは孰れも出來損つて出發して居るのである。

さうしてその小乘宗といふものは餘り勢力を得ないで、直に華嚴宗、法相宗、三論宗といふ大乘の宗旨が勢力を得てしまつた。この方はいきなり彼の『華嚴經』のやうな思想を以て、非常に人生から懸け離れてしまつた、殆どその教義は極く複雑煩瑣な哲學の思想に突入してしまつて、人生の生活といふや

うなことゝは縁が切れてしまつたのである。既に彼の奈良の大佛といふものを建立した點から考へてもわかる、釋迦はあゝいふ大きな相では人生を救ふことは出来ぬから、人間と等身の、その中の最も完備したる相を以て迦毘羅衛城に悉達太子として生れられたのである。それをあゝ云ふ雲突くやうな大きなものにしてしまつたからたゞ大きいといふだけで少しも人間の情意感覺といふものに觸れない、あゝいふ圖抜けた大きなものになつてしまへば有り難いといふ感じは人間には起らなくなる。その證據には今奈良の東大寺に行つてあの大佛を見た人の感じといふものはいきなり「あゝ大きいな」と言ふだけで、これが佛様である、有り難いといふ感じは起らない、「あの鼻の穴を下駄を履いて通れるさうな」「箆を持つて歩けるさうな」「えらゐものだ」といふことを言ふに過ぎない。それは何故左様な侮蔑の態度に出るかといふと、人間の情意感覺といふものと離れては、人間は美觀も有り難いといふ感じも起るものではないのである。どんなに自分の妻が美しくあるから成べく立派に大きな寫真に撮らうと言つても、その寫真を引伸し／＼して大佛様のやうなものにしてしまつたならばどうであるか、顔は非常に別嬪だけれども鼻の穴に下駄を履いて入れるといふやうなことになつたならば、美しいとか可愛いかいふ感じは隠れてしまふ、人間の情意感覺といふものには程度がある、さういふことはお釋迦様の方が能く考へて人間の世界に出て來た、その事は法華經の「妙音品」を讀んで見れば直ぐわかる、釋迦牟尼は人間を濟度するが爲に體は小さくお生れになつて居る、妙音菩薩よ、お前は雲突くやうな大きな體だけれど

も體の大きい事を以て威張ることはならぬぞといふことを、妙音菩薩が自分の師の佛から訓戒せられたといふことがある、それが本當である。人間を救ふが爲に相は小さくお生れになつて居るけれども、形の小さいのを以て侮ることはならぬといふその趣意さへ理解したならば、何も無暗に大きくする必要はない。ところが華嚴宗の思想は、素人考へて考へてもそれを餘りに大きくし過ぎて尊敬心を失つたと同じやうに、華嚴の法門もやはり間が抜けた方へ行つて居る譯である。遂に華嚴宗といふものは今日殆ど亡びた状態であつて、漸く法隆寺とかあゝいふ舊い寺があつて美術保存の上から國寶として保護を與へられて居る、歴史の上から聖德太子が建てられたお寺だといふやうなことに依つて保護を受けて存在して居るので、信仰意識に依つて維持されて居るものではないのである。さういふ風に彼の華嚴宗、法相宗といふものも殆ど今日はその勢力は無く、三論宗といふものは既に早く亡びてしまつて日本では名前を知つて居る人も無いくらゐるのである、僅に法隆寺が法相宗に屬することになつて居るくらゐのもので、皆様の間には法相宗だの三論宗だの言つたところが「そんなものがあるのですか」といふ位のことになつて居る。

斯様に日本佛教は奈良朝の出發點からして、小乗の三宗有りと雖も小乗の教義に基いた宣傳ではないましてや大乘の三宗はそれに反對して起つたものである。その次に傳教大師が出來て、南都六宗を統一して法華經の思想に依られたといふことは非常な立派

なことであつて、その時に本當の佛教の光を發すべきであつたと思ふけれども、不幸にして傳教大師の思想も吾々から見ては遺憾無きを得ずで、非常に立派な方ではあつたけれども、やはり法華經を觀念の方に導き、又小乗の宗旨を攻撃するといふ態度に出た爲に、傳教大師の「顯戒論」と言ひ「法華秀句」といふものはやはり大乘宗の秀でて居ることを盛に説いて、小乗を啓發して斯ういふ價值があるといふやうに阿含の價值を發揚するといふ努力は爲されて居らぬのである。

その後弘法大師が出た、偉い人だといふことだけれども、何處が偉いのか問題のことであつて、彼は大日經に依て大日如來といふものを立てた、これがいつたい非常な格外れのことである。大日經といふものは釋迦如來の説かれたお經の中の一つであるけれども、その大日といふ名前を以て、釋迦如來でなく別の佛の如くに弘法大師は言ひ成したのである。毘盧遮那といふ言葉は元來法華經の中にも釋迦如來を指すといふことがハッキリ言つてある。釋迦牟尼を毘盧遮那遍一切處と名け奉ると申して、その毘盧遮那といふことを譯すれば大日と言ふのである、大日の梵語は毘盧遮那身である、何も毘盧遮那といふものは釋迦以外の者を指すのではない、釋迦の尊さを一面から言つて毘盧遮那と言ふのである。お日様の光は世の中を照らす、それは表面を照すのであつて内部を照すのではない、心の内面を照す光はお日様には無いのである、併しお釋迦様は日の照し得ない人間の心の闇をお照しなされる故に、日に勝るといふので大日といふ名を附けるのである、「大」といふ字は大多勝と言つてまさる、といふ意味である、

形が大きいといふことではない。その日よりも勝れりといふことは、お釋迦様が人間の心の闇をお照しなされる上から出た名前であつて、やはりお釋迦様のことである。さう解釋するのが正しいのであつて、大日といふ名前を以て釋迦以外の佛としてこれを對立せしめ、さうして釋迦を侮辱して大日の屢取にも及ばぬといふやうなことを言ふに至つては、これは異端邪説である。誰が何と言はうともさういふことの許さるべきものではない、これは所謂天一坊式思想である。

さういふことを明晰に斷定し得ないのは、日本の人達が佛教に關して誠實なる研究及び信念を有たぬ爲である、これは日本國民の大罪惡である。國體のことに就て考へたならば、南北朝の問題すら正閏を論明して北朝の天子は正天子にあらずといふのである、大日如來と釋迦の關係などは北朝と南朝のやうな譯のものではない、今言ふ通り釋迦に名けたる一つの名前である、釋迦の徳を讚嘆して、日は形を照して心を照さず、釋迦は心の内面の闇をも照す、日に勝るといふので毘盧遮那(大日)と申したのである。それは佛教の解釋に於ける定論としてきまつて居ることである、又現在この世に二つの佛が出て、甲と乙とどちらが偉いのだらうかといふやうなことを争はずものではないといふことが佛法の定論なのである。天に二日無く國に二王無きが如く、一佛化境に二の尊號無しと申して、釋迦如來の教化せられる娑婆世界に別の佛が出て、釋迦とどつちが偉いのだらうかといふやうな疑惑を起させるやうなことは無いといふのが、一切經の通判と申して原則である。國に二王無しとか天に二日無しといふ言葉を日本

の國體の尊嚴を表す言葉として用ひて居るのも、やはり佛教に釋迦が説いたことを持つて來て言うて居るので、その本家本元は佛教である。そのくらの佛教といふものはハッキリ中心を立て、あるにも拘らず、大日などといふ佛が出て來たが如く出て來ざるが如く、説教したが如く説教せざるが如く、甚だ曖昧胡亂なことを言ふのである。「大日經は大日如來といふ佛が説いたのだ」と言ふ、「何處で説いた」それはこの人間の世界の中に出て來て説いたことは言へないから「天で説いた」と言ふ、「天でどんな言葉で説いた」、「無論人間世界の言葉ではない、天の言葉で説いた」、「それがどうして人間世界にわかるお經になつて來たか」、「それは巻物にして猿が啞へて來た」といふやうなことを言ふ、猿は樹の上までは登るけれども天へは上れない、飛行機に乗つて來たとも言ふならばまだ宜いけれども、猿が啞へて來たといふに至つては滑稽なことである。假に猿が啞へて來たにしたらところが、天で人間にわかるやうな字で書いて呉れるならばやはり同じことである、人間にわかるやうな話をしたのは駄目だと言つて釋迦の説法を侮蔑するならば、人間にわかるやうな文字にして來た大日經もやはり駄目ぢやといふことになるので、實に愚論である。さういふことをどんな偉い人が言うても、左様な人間の思想を徒に混亂せしめるやうなことをその儘容認して行く上に於ては、思想問題といふものは決して正しき道には進み得ない。或る一つの場合にごま化しを許すならば他の場合にも許すといふことになるから、何處まで行つても思想といふものは正善に歸することは出來ない。これは日蓮聖人が毅然として言うたが如くに、弘法

大師は如何に偉からうとも一切經の中に法華第一とある、この「一」の字を弘法大師が「三」と讀んだ、これはつまりごま化したのである、一の字は何度讀んでも一であるが「弘法は智者なるが故に一を三と讀む」と言はれた、これくらゐ皮肉なことは無い。それを尙日本人は悟らない、大日經といふやうなものが法華經より偉いと思つて居るだけでそれを開けて見ない、内容を少しく研究したならば直ぐわかることである、たゞ表面からさういふ議論をして、弘法はなかく偉い人だと言ふ、どの位偉いかわからない、たゞ人が偉いと言ふから偉いのだらうといふやうな譯である。

斯様なことになつて居る所に又淨土門といふものが出て、これが又釋迦を或る意味から侮辱したのである。阿彌陀經は釋迦の説いたものとは言ふけれども、釋迦が自分ではヨウ濟け得ないから、阿彌陀様といふ偉い佛があると説いて紹介した、釋迦は廣告屋見たいなものである、阿彌陀様を紹介しに出て來たものである。斯ういふことを以て、釋迦は一個の説教者であつて救濟主は彌陀であるといふので釋迦を侮辱してしまつた。これは勿論間違つたことであつて、釋迦が一切經の中に通じて「俺は人を救ふことが出來ないから、たゞ紹介に出て來た廣告屋である」そんなことは阿含を始め一切經の中に通じて微塵も言うて居る所が無い。佛といふものは所謂全智全能に達したるものである、覺りに於ても力に於ても、もう間然する所無しといふことが、阿含の初めから涅槃の終りに至るまで一切經を通じて佛陀といふものに對する定義である。釋迦が佛陀に成つたことを否定すればいざ知らず、彼が佛陀に成つたこと

を認めて置いて、而も彼が猶ほ救ひ得ないなどといふことは大なる矛盾と言はなければならぬ。そんな明瞭な矛盾を許して、何とはなしに釋迦では救へない阿彌陀様でなければならぬといふ所に捻ぢ込んで行かうといふのが淨土門の甚だ卑怯なやり方である。ゴタ／＼という／＼な理窟を列べて居るが、それは偉い人と言へば偉いやうなもの、つまらないまごつきや根性の悪い議論見たいなことをゴタ／＼やつて来たのであつて、釋尊がお立てになつた教の全體を傷けぬやうに觀察する上から見れば、餘りそれ等のやり方は褒められたことではなかつたといふことを私は明瞭に斷言して置く。この言葉は私は死んでも長く生きて居る言葉である、將來本當の佛教を研究する時、賢明なる日本人又世界の人類は、私が只今申して居ることを是認する日が必ず来る、本當に佛教を研究せずしてたゞ偉いとか偉くないとか宜い加減のことを言つて居るのである。

どうしても日本佛教に於ては阿含を取入れない點に於て大なる缺點を生じて居つた、今日以後佛教が人生に直接の效能が無いとか、或は迂遠であるとか厭世的であるとか抹香臭いとか、いろ／＼の非難を受けるのは、阿含の人生に最も接觸して居る教化を取込んでそこに基かすして、大乘の或る偏つた教に入つたが爲に斯ういふ非難が起るのである。これは佛教が悪いのでなくして、佛教を應用する上に事實に即した阿含の教を切り棄て、激しく言へば空想に等しいところの權大乘の諸經に趨つたが故に、佛教が空想的の宗教と言はれるやうになつたのである。これは應用する人の罪であつて、從來非常に有難いと思はれて居るお經といふものは、阿含を切り棄て、考へる時には、どうしても空想に近い事が多いのである、その點を反省しなければならぬ。

然らば法華はどういふ立場に居るかといふと、その阿含を活かすといふことが抑々法華の目的である。これは私がさういふことを時代の必要に應じて叫び居ると思つたら大變違ふ。法華經そのものは權大乘諸經が阿含を切り棄て、空想に趨つたことを諷めて、阿含に味方をし、阿含を活かして立つたところのものである、その事はハッキリ法華經の中に説いてあつて「譬喩品」の初めにあるところの舍利弗の頌

昔、波羅奈に於て四諦の法輪を轉じたまひ、今復た最妙無上の大法輪を轉じたまふ。

といふ偈がある、これは一切の佛教を阿含と法華に依つて貫いて餘はごうでも宜いといふ意味を現して居るのである。昔波羅奈に於て説いた四諦の法輪といふ阿含の人生に即して教を立てたところのもの、今説くところの無上最大の法華經の教と、この二つさへあれば餘は抜きにしても教佛は宜しいといふ意味がそこに現れて居る。非常に澤山のお經が説かれて居るやうであるけれども、阿含と法華とがあれば一切經は足りるのである、即ち直接實際に即した教と、高遠なる理想に達した所と、この現實と理想といふものを調和し來たるので、阿含と法華さへあれば佛教の思想は完備して居るのである。その意味合を今申すやうに事細かく、一々の問題に就て阿含の思想と法華の思想の結合されて居ることを解釋した

のが涅槃經といふ四十卷のお經になつて居る。法華經は大綱を擧げて阿含と法華の接合を示したのである。それは「法師品」第十に於て

是の深經（法華經）に、聲聞の法を決了すれば是れ諸經の王なりといふを聞き、聞き已つて諦かに思惟せん、當に知るべし、此の人等は佛の智慧に近づけるなり。

といふことが説いてある、この法華經に來つて聲聞の法即ち阿含の教を十分に押詰めて考へることが出來たならば、それが諸經の王となるだけの意味合を有つて居る、一番淺いと思つた阿含の教に一番深い意味合を發見し得るといふことを法華經に於ては説くのである。その事を聽き已つて本當に考へたならば、佛様の智慧に合した佛敎といふものが得られるといふことを説いてある。これはモツと低いことに就て考へて見たら直ぐわかる、宗教の一番偉いのは、日々夜々に心が動いたりしたのが、總ての上、信仰の光が及んで、さうして高い、真理にまでそれが續いて、今日の生活から死後永遠の生命に至るまでも役立つところの敎であらねばならぬ、事實に即して而して永遠に及び絶對に達するところの敎でなければならぬ、事實から斷れたるたゞ高遠なものは役に立たぬのである。そこが敎に就ての大事な點だと思ふ、儒敎などでは寧ろその方を非常に能く注意して居る、「道を爲して人に遠きは道にあらず」とまて言つて居る、これは道だと言つても餘り高い、人間の實際に役立たぬやうなものは道とするには足りない。先帝の御製にも

白雲のよそにもとむな世の人の

まことの道を敷島の道

といふ御製がある、白雲のよその天に上つてしまつたやうな、さういふたゞ高いといふ敎は役に立たない、實際人間生活の上で即してそこに光を與へて行くものでなければならぬ。

この事は權大乘佛敎の人達は一言も無い所である、これが爲に今まで儒敎の方からどつ腹を扶られた、であるから朱子が佛敎を批評して「その説高きに過ぎて空言施す所無し」と言つて居る、佛敎は高いやうだけれども空論で實際には役立たぬ、斯ういふ非難を受けて徳川中世以後佛敎といふものは追ひ捲られて遂に勢力を失墜し、明治維新に至つて廢佛論にまで押寄せたものである。今猶ほ日本の支配階級が佛敎を侮辱するのはそこにある。それといふものは今までの日本佛敎が確かに高きに似て迂遠な所があるからその非難を受けたのである。たゞ佛敎全體がさういふものだと思つたのは朱子の早計であるけれども、事實に宣傳し應用して居る當時の佛敎の流弊から見れば、高きに似て空言であつたといふことは事實である。この點は大に佛敎徒が覺らなければならぬ所であつたと思ふ。

左様な譯で法華經は初めから阿含の教を活かして行くのであつて、その事は餘程詳しく説いてある。法華經の初めの頃に説いてある思想は全部その問題である、譬喻の方で言へば、長者の息子が迷つて乞食になつたのが再び父に邂逅ふて、日儲取になり番頭になり、遂に家督相続をするといふあの長者窮兒

の譬喩でも、やはりそれを教へて居るのである、即ちその日備取をして居る子供でもやはり長者の子であつたので、決して乞食ではないといふことを明かにして居る。法華といふものは阿含なら阿含の人及び阿含のやつて居る事柄を皆な活かして來るのであつて、決してこれを卑めないものである。羅漢なら羅漢、聲聞といふものを侮辱しないのであつて、それは尊い長者の子である、遂に家督を相續するところの後繼であつた、斯ういふ具合に阿含の教を能く活かしたものが法華經である。

この事は徹底的に方針を決定しなければならぬことである、私は「大藏經要義」の中に呉れどもその事を論明して置いたし、その後「綜合的佛敎觀」といふ書物にもその點を詳しく述べて置いた。併しこれを了解し得ない者は永久に了解し得ないであらう、それはその人がそれだけの學問の準備が無いからわからねのである、自分がそれを受け容れるだけの準備が無い、阿含に對してさういふ觀念を有つべしと言はれても、阿含經の一卷も讀んで居らないし、さういふ大きなことを佛敎に就て考へて居らぬものであるから、何遍言はれても、その時だけはわかつたやうな顔をするが後では直ぐ忘れてしまふ。それは自分としては自分の思想が不確實であるからだとは思はない、それ等の人が佛敎研究の準備知識が足らぬからだと思つて居る。モウ少し佛敎に對する研究者が進歩して來たならば私の言ひ居る事を「あゝ、あんな事を早くも言ひ居つた人があつたか」と驚歎する時があるだらうと信じて居る。どうしても日本佛敎は全體として阿含を逸して來たといふに就て大懺悔をしなければならぬ。然るに今日猶ほ

平然として醒めないといふことは、實に小人非を飾るの態度と申して宜しいのである。佛敎を應用するに小乘阿含の教を除外して進んだことは、日本佛敎徒全體が相濟まなかつたといふことを大聖釋迦牟尼の前に懺悔すべきであるといふことは考へる。

日蓮聖人はどうであつたかといふと聖人はその事を能く了解して居られて、決して事實の釋尊から離れて教を立てないのである、何處までも伽耶成道の釋迦に於て本佛を説き、又衆生の實際生活に應用したるところの佛法といふものを活用したのである。であるから日蓮聖人の佛敎は非常に深いところの法華經に依つて居るけれども、活き／＼したる人生の教である、現實的な教であるといふことが能くわかる。これを學び損ふから、現實といふことがたゞ祈禱主義になつてしまつたり迷信になつてしまつたりするけれども、日蓮の本意はさうではない、やはり日常生活の中に光を現して行くのであるから、例へば「宮仕へを法華經と思召せ」といふやうに、日々主人に仕へて居るその日常生活の業務、それが法華經である、「女房と酒打飲んで南無妙法蓮華經」家庭生活の團樂の中に法華經を發見しなければならぬ、「天晴れぬれば地明かなり、法華を誦る者は世法を得べきか」世法即佛敎である、法華と世間といふものは一つである、或は「立正安國」と言つて法華經の宣傳、それが即ち國家の安泰興隆である、斯ういふ具合に宗敎を以て現實の問題に接合せしめて居る。

これが一方から言へば即ち阿含の思想である、阿含は現實を除外せずして佛法を立てられた、これは

あらゆる點に於て阿含の研究を進めて行けば今申す意味合がわかつて来る譯であるが、佛敎小觀として先づこの位のことは考へて置かなければならぬ。今日及び將來に對して佛敎を研究し、佛敎を信仰し、佛敎を發揚するといふに就ては、法華經は無論第一として抑へなければならぬけれども、同時に阿含經を考へて阿含を研究し、阿含の精神意味合といふものを了解して、さうして法華經の理想と結んで進んで行かなければならぬ。左もなければ現實と理想を合せたる完全玉の如き佛敎は現れて來ない、力ある佛敎は現れて來ない。さういふやうなことを一々の問題に就て詳しく阿含と法華の接合を説明したものが涅槃經であつた。

斯様な意味に於て日本佛敎の在來の應用宣傳の上には多大の缺陷があつたといふことを自覺して置くことが、私は佛敎小觀として大切な點であると思ふのである。(次續)

恭賀新年

財團 統一團
法人 幹部一同

更賜壽命

大僧正 酒井日慎

これは佛陀の金言で「更に壽命を賜へ」と希ひ求むる意で更にとはあらためてといふ語である。俗にふんど「どうかたすけて」ともいはれる。此の文の出典は有名な法華經壽量品である。此の經は釋尊が御歳八十に近い頃、印度の靈鷲山といふ山の頂で、本化の大菩薩とて學問も德行も最も高い聖者達の前で、佛陀出世の本懷衆生成佛の眞法門即ち如來の久遠の本壽功德慈悲を説き極められた説法、そして天地一切の萬物生類も亦た此の通りの久遠の本壽命の所有であることを釋尊が永い修行と研究と體驗の上

に顯證せられた、世界最上の大宗敎である。之までといふものは、一切萬象は皆な夢幻泡沬の中に朝露の如く、電光の如く、醉生夢死の世と思ひしに、豈に圖らむや、さばなくして、天地萬物塵の一塊も水の一滴も永く久しく存在して、決して消滅するもので無いといふ眞理を始めて説き明かされたので、爰で萬物が始めて永恒不滅の大生命を賦與せられた經典中の譬喻の託語である。

譬喻の託語とはこうである。或る時に一人の立派な名醫があつて多くの小供達があつた、此の名醫が

ちよつと外出の時に他の惡漢が来て、毒を盛つた物を喰はした。毒は忽ち身體に廻はつて、小供達は皆な地上に轉々と苦しんで居る。之を見た良醫は大に驚き、可愛想にと早速調劑して毒消の藥を飲ました。すると輕症の小供は直ぐに治つたが、重症者は慈悲深い父の語さへ毒に中られて信じないから治らない、唯だ早く助けてとせがむ計りである。此のせがむ時の語に『更賜壽命』の語が出たのである。此のせがむ心、即ち此の『更賜壽命』の語は誠に尊く人生に尤も必要なことである。

我等今一切の萬物は、總て是佛陀體得上の久遠の大生命の所有者である。生きている者には發達が伴ふ、發達には千變萬化が伴ふ。今之を一本の大樹に譬へる、大樹となるまでには、種々難多な變化がある。葉の落ちるは次の葉が芽生へである、枝の枯れるは他の枝の茂るが爲めである。花は實を生み、實は繁殖して無限に伸びる。個々の現象から見れば變化極

度か死線を超へる苦悶に打ち勝つて始めて『更賜壽命』の尊さが判る。
我は今『更賜壽命』されたのだと感ずる時、始めて今日の存在が尊くなり。醫者の仁術も、良藥の價値も味はれて、蘇生の妙身を感ぜしめらるものである。此の壽量品の良醫とは、誰あらう本佛乃ち大慈悲釋尊である、良藥とは乃ち妙法五字の本法であり、小供とは末法今の我等凡夫である。此を如實直觀して『更賜壽命』とせがむ時に、再生の妙身復活の聖體乃ち久遠の本壽命を得た身となるのである。



りないが、一樹の生命から見れば限りなき生々發達である。人類も亦た是の如しで、人生五十只の一日も變化なしでは無い。相變らずを平和の生活として居るが、實は刻々に相變つて居る。此處は生れ彼處は死んで居るから、或は喜び或は悲んで居るが、昔しから嵐の後は晴れであり、春の次に秋が来る。之が客觀即ち對岸の火災ならば平氣であるが、主觀即ち焦眉の急となると爰に何人も當惑する。當惑すると茲に所謂小我を忘れて大我を求むる時に、此の『更賜壽命』といふせがむ真理が開悟するのである。頭腦の緻密な人程人間は偉大であり、勳章の多い程軍人はエラクなる様に、普通人も此のせがむ心の度重なる程向上進歩するものである。粗雑な頭腦は阿呆に近く、戰歴なき軍人は役立たず、艱難窮乏に苦しめる人は、物の價値が判らぬ。濡れ手で泡の如くに親の財産を得たものは、一朝にして之を無にしてから茲に粒々辛苦の金が初めて尊くなる如く、幾

豫 告

一、新年會 正月七日午後二時於本部

一、御書講座 正月十三日(水)ヨリ開講
小林一郎先生、開目鈔

一、日曜清集 一月中ハ毎朝六時四十分
ヨリノ寒修行會ニ合體

右御諒承誘合御參加相成度候

財團 統一團

破邪顯正 (其三)

儀部滿支

生長の家を覗く

一冊の本を手にした丈で、其病氣の快癒と共に家庭が明るくなり、一家和合して人相までも柔和となり、従つて勤勞者としては上役の愛顧を得、商人なれば註文が増加し、藝術家であれば光明的な藝術の勞作を意欲し、子供は學校の成績が向上するといふやうないかにも人の飛びつきさうな光明の生活を宣傳してゐる谷口雅春さんといふ教祖は、如何なる經歷の人物かといふと、氏は素兵庫縣の産れで、早大英文科を卒業してから、神戸である會社員として勤めて居たが、機會あつて西田天香氏の一燈園に入

り、其後大本教へ轉じ、心靈術を淺野和三郎氏の日本心靈協會に依つて學び、何等か把む處あつたらしいが、よい加減に後足で砂を踏むやうにして、去つた。而して元來縁のあるクリスチャンの素質に一種の彩色を施して打つて出たのが『生長の家』運動である。依つて彼の主張なり、教旨とするものは彼の基、佛、等靈的遍歴の折衷表現といふて然るべきである。

今其骨子とする七つの光明宣言を見るに、

一 吾等は宗派を超越し、生命を禮拜し生命の法則に隨順して生活せんことを期す。

一 吾等は生命顯現の法則を無限生長の道なりと信じ、個人に宿る生命も不死なりと信す。

一 吾等は人類が無限生長の眞道を歩まんが爲に、生命の創化の法則を研究發表す。

一 吾等は生命の糧は愛にして祈りと愛語と讃嘆とを、愛を實現する言葉の創化力なりと信す。

一 吾等は神の子として無限の可能性を内に包有し言葉の創化力を驅使して大自在の境に達し得ることを信す。

一 吾等は善き言葉の創化力にて人類の運命を改善せんがために善き言葉の雑誌『生長の家』を發行す。

一 吾等は正しき人生觀と正しき生活法と正しき教育法とにより病苦その他一切の人生苦を克服し相愛協力の天國を地上に建設せんが爲に實際運動を起す。

以上の七條が、運動宣言で勿論宗教の本質教義とするには甚だ不備なものである。或人は谷口氏の唱導する處『生長の家』はクリスチャン・サイエンスにあると有名な人前には告白して居るといふ。従つて生長の家に就ての根本方策は、かのアメリカに生れたクリスチャン・サイエンスを視へば、よく其の缺點が暴露され、多くの人に正見、正思惟が與へられるであらうと。

それではクリスチャン・サイエンスといふのは何かといへば、西曆紀元一千八百七十八年、北米ボストンに教會を建てたエディ夫人に創まるもので、此の夫人は幼少の時から若干精神病の素質があつたらしい、二十三歳の時結婚したが、數ヶ月後に其夫は死亡し、幾程もなく自身は脊髓病に罹つたが、次第に交靈術に興味を持つやうになり、三十三歳の時に再婚したが、程なく離別してしまつた。其頃から

彼女は病氣に悩んで居たが、やがて奇蹟を現はす様になつた。

彼女が四十六歳の冬、イーストの水結した街道に打倒されて瀕死の状態に陥つたことが大きな縁となつて、遂に心境の變化を來たし、生命の神法、即ち「基督の學」なるものを發見し之を名付けて「クリスチャン・サイエンス」と云つたのである。彼女の説は、唯一の實在は心意と神の觀念である。勿論之は感覺的に知られるものではないといふ。而して病氣は此心意の傷害に起因するからして、心意療法によつて之を根絶し得るといふのである。人は心意が凡てであつて、物質は皆無であり、病氣は幻想であるといふ。かゝる體驗が重なるに伴つて五十五歳の頃から「科學と健康」といふ一種の刊行物を出版し數年後雜誌「クリスチャン・サイエンス」が發行されて、其運動は急速各方面に擴大し、千八百九十年には國民的クリスチャン・サイエンス會が設けられ

漸次信徒が増加し、千九百〇六年ボストン大會に於ては四萬人の信徒が參列したと稱せられて居る。四年後八十歳を以てエデイ夫人は逝去した。其主張は疾病の治癒は決して奇蹟ではなく、正當の現象である、又單に生理的の疾患のみでなく、道徳的の頹廢の根治もするといふて居る、而してクリスチャン・サイエンスは物質や肉體の非實在を肯定するものな

のである。
是等の思想に對してジエームス・グレイ博士は「光の使を裝ふ惡魔」であるとしてクリスチャン・サイエンスの邪惡なる點を指摘して居る。その内容を爰に紹介するの要はあるまいが、生長の家、光明の宣言の基礎が其處に關係ある上からは、一應グレイ博士のいふ聖書に反する點の要項を掲げ賢明な讀者の參考に資したい。

一クリスチャン・サイエンスは、物質の實在といふ事を否定する。

二クリスチャン・サイエンスは、物質の實在を否定するのみならず、神の人格性をも否定する。

三クリスチャン・サイエンスは、人格的唯一神の存在を否定すると同時に、イエス・キリストの實在をも否定する。

四クリスチャン・サイエンスは、イエス・キリストの實在を否定するのみならず、サタンの實在をも否定する。

五クリスチャン・サイエンスは、惡魔の實在を否定するばかりでなく、罪の實在といふことをも否定する。

六クリスチャン・サイエンスは、罪の實在を否定するばかりでなく、祈禱の眞實といふことをも否定する。

そこで生長の家はそれ等が基本であらうが、又共に佛敎をも加味したらしく窺はれるからして、佛眼

を以てかの光明宣言を見る時に、第一條の「生命禮拜とは自分自身を敬ひ拜む」といふ、この考へ方は汎神論で甚だ合理らしく一般には好感を以て迎へらるゝであらうが、宗教の上からは甚だしい脱線であり、冒瀆であり、惡魔の言論である。佛敎に於て禪家の見性成佛、何に因て見性するかを知らず短的に佛何ものぞと自尊に陥り佛様の木畫の尊像を燒いて經卷、何物ぞと反故扱にする類である、己身本佛の理論は、日蓮教學に於ても説かれて居るが、それは決して自分自身を敬ひ拜むといふ淺薄なものではないのであつて、詮する處は超人格の實在が明かにされて、然して後に解決せられる事柄なのである。徒らに自己崇拜を是なりとする思想を養ふ時に、君臣親子師弟の上下の情操を破壊して、恰度今日勞農國の實現して居る極端な個人主義に墮落し、社會は國譯に、國家は無道義となつて暗黒の世界が現出する最も警戒すべき主張である。

日本精神を高潮し、一君萬民の國家思想を八ヶ間敷く論じ、文書字句の公刊に嚴重な取締りをせる今日、かゝる宣傳を見逃してよいものであらうか、とさへ思はしめる。表面平和を装ふて内部に恐るべき毒牙を藏するものが追々増加して居る現代は、彌々誠心すべきである。生長の家が宗教でなくとも、宗教的態度を採ることに於て、吾等は一層注意を拂はねばならぬ。それは宗教は大なる傳播性を持つて居るものであるから、社會を毒する影響も非常なものである。この一箇所を論じて、甚だ重大事を醸すべきである。

それから生命の創化の法則を研究發表するに就て谷口氏は「吾々が生長の本道を歩むべき方法を研究して（研究と云ふても自分がペンをとる時に靈感的に教へられて自分の豫想もしない真理がバツと判る場合が多い）これを皆様にお取次する」といふことは、曩にエディ夫人の心境を真似るものであり、自

明宣言の第七條を見たり、其の解説を讀んでも、どんなのが正しい人生觀であり、正しい生活法であるかの原理が明示されてない。唯そこには「自己の生活を善くすると共に次第に具體的に社會的にも救ひの方法を實現して行かなければならない、救ひの方法の一つとして病氣の場合には生長の家の家族はメタフィジカル・ヒーリングを相互に指導又は施法して高價な醫療を要せずして病氣を治療する事が出来、相愛協力の實をあげる事が出来るのであるが、病氣直しばかりが地上に天國建設の方法でもない、又如何なる靈妙な治療法も、たゞそれだけでは萬病を癒すといふことは出来ないのである……病氣は宿業的に來るのであるから、なか／＼治りにくい、これを治す唯一の道は「罪は本來ない、生命は神であるから苦行しなくとも其儘で完全であり圓相である」と云ふ真理をその人の奥底にあるたましひに自覺せしめるはかはない」といふやうな病氣の話が澤山に列

分では豫想しない真理と思つても、それが往々第三者の冷靜な哲理から批判する時に、一種の錯覺であるやうなこともあつて、これがまた極めて危険性を多分に帯ぶるものなんである。大衆を教化誘導せんとするには、矢張り大覺者の教理を充分に學んで、眞善美の完備した明教、即ち哲理も道徳も宗教も圓融された立派なものがあるから、それに基いて敷衍すべきが教家としての正道であつて、徒らに自己の不透明な迷想に依る直感論のもので世間に光を與へんとしても、寧ろ悲しむべき結論に到達するであらう。近くはかの人の道の御木氏にしても、大本教の出口氏にしても、天理教等々教祖の學歴は極めて淺薄低劣なもので、從つて人心を陶冶善導すべき教理は持たない。其人格を見ても完全圓滿とは、どうしても思へない、一種の變態で群衆の弱點を利用して翻弄する宗教のパチルスである。

次に生長の家の人生觀と生活法を知らうとして光擧して、人生は、「人間の生命は終には過去世の因果關係から、横には環境に對する自衛手段として、いろ／＼の病氣や不幸をつくつて、それによつて病氣そのものや、不幸そのものを一種の手段として生命の自由即ち救ひをもとめてゐるものである」といふ、而して「罪を犯さないでも此の世に生きられる工夫をし、又吾々の接觸する環境を淨めて生命が苦痛や病氣といふ手段をつかつて自衛を講ずる必要のない天國淨土のやうな環境をつくるやうにしなければならぬ」と云々と、これが彼氏の人生觀であり生活法のやうに現はれる。

一體罪惡は本來ないと主張することも、グレイ博士の第五項に該當するものであつて、哲理に悖つた獨斷といはねばならぬ、神は正善であると同時に邪惡の方も具備されてゐることを全能といふのである。吾等の小羊は罪の子であり、惡の塊なりと見る基督教の人身觀も甚だ偏狹困陋となり、不徹底なもの

であるが、更に唯一神の人格實在を否定し、汎神論に流れたことは基督教理にも反逆せるものである。そんな不完全な思想で、この地上に淨土建設といふことは全く戯論である。然るにそれを以て正しい教育法として神聖なるべき少年少女の魂の糧とせんとする如きは、暴も暴、尚に寒心の至りである。

由來「宇宙の一切事物はリズム即ち言葉で出来てゐる」といふやうな單調な頭腦を以て組織された生長の家は、無智蒙昧の者は煙に捲かれてしまふであらうが、苟も佛典の一枚も讀んだものには情けなく思ふ。而して宗教を知らざる大衆をして誇大な宣傳廣告術を以て魅了せんとする手段は實に唾棄すべきである。

我同胞が幾分でも宗教といふものを理解して居れば、近頃問題にされる類似宗教とか乃至迷信の類は發生しないであらうと思ふ時に、結論として濟世利民の根元をなす立派な宗教の本質を附記せずばなる

きを去つて難きに就くは丈夫の心である。

明治以來我が一部に於て西洋思想を崇敬し、科學知識に魅せられた結果、彼等の失敗を又我等にも徹を履ませらるゝに到つたことは其昔、日蓮聖人が「彼の國によりし法なればとて此國にも好かるべしと思ふべからず」との警句を用ゐないからであつた。彼の國に都合よい教でも、此國には國家の慣習も異へば、民族性も違ひ直ちに其儘採用は出来ないこと明瞭なんである、何に況や彼國に於ても不適當で行詰るやうなものを鵜呑にした酬は忽ちに現はれた。然る處今や將にその反動が起らんとして居るが極端な鎖國的態度は是れ亦復大に誠心すべきである。

須らく正理中道を以て堂々と民衆を教導して邦家の興隆を期し、そこに世界人類の福祉を増進せしむべしである。

まい。

恩師 本多上人は、宗教の本質は先づ人生觀を明示し、人間とは如何なるものであるか、而して宇宙に超人格者の實在を説き、その精神的の結合感應に依つて、お互日常生活上に力強く自己を反省し、精進する道義感情を以て人類文化の向上に資すべき最大要素なりと解釋されて居る。

凡そ世間に生活難が増加すると、一方には必ず宗教的情操の要求を促がすものである。かゝる時に或は利慾の爲に、或は賣名の爲に、或は自らの活路に資せんとして虚偽な、假面を装つた悪魔が必ず跋扈するであらう。而して夫等は隨他意なるが故に甘言令色極めて入り易く解し易いから忽ち大繁昌を見るが、眞實のものは爪上の土で極めて尠ない、又さう宣傳もされてない、それは難信難解であるから求道の志ある者にして漸く結縁することを辨ふべきである。「學問は天に昇るよりも難し」である。「易

岩野將軍云く、「法華經をいろくど六

かしく捏ねあげてしまつたが、これを還元すれば極めて簡單なんである。即ち拜むことな

んである、正直に信受すればよい」と。

近來日蓮門下は修行が甚だ粗雑の様に見はれ

る。爰に本部に於ては例の通り 正月六日

より二月四日迄 寒三十日間 毎朝六時

四十分から八時迄、訓譯妙法華經一品

龍讀誦唱題修行を勵み、訖つて朝食供養の意

宛深い朝詣りに大奮發隨喜下さい。

日蓮上人の御迎春

三二

笹木欣爾

春の初めの御悦び、木に花の咲くが如く、山に草の生ひ出づるが如しと、我も人も悦び入りて候。

——春初御消息——

一、前の言葉

又こよみが一廻りして、昭和十二年の新春を迎へることになりました。日蓮上人が池上で御入滅になつてより、六百五十六年になります。年頭に當つて私の思ふ處は、日蓮上人が常に如何なる新年を御迎へなされたかと云ふことでもあります。殊に、身延の山にあつてのそれは、何分御晩年であるだけに、一層私の注意をひかすには居りません。新年に因みまして、日蓮上人御晩年の正月のさまなどを御遺文を通して瞥見し、これに依つて、一には本化門下として上人思慕の情をあたため、一には求道者として年頭反省のよすがにもいたしたいと存じます。尙、便宜上、こゝには弘安二年から同五年までの、日蓮上人の今生に於ける文字通り御最後の四年間に就きまして、縮刷遺文集を拜したいと思ふのであります。

二、弘安二年の新春（壽五八）

弘安二年の新年は、日蓮上人が身延へ御入山になつてから五度目の春に當ります。寒さの酷しい、不便な上に兎角不自由な山の春にも、大分に慣れておいでになつたことでせう。此の年の第一筆は、正月三日の上野殿御返事（縮遺一八二五）に始つて居ります。日附から云つて、年頭の御様子を知るには適當な御消息であります。左はその一節であります。

……日蓮は法華經を諷る國に生れ合せて……國主も憎み人民も怨をするので、衣服も薄く食も乏しくて、布衣でも錦と思ひ、草の葉でも甘露の味と思ふて居る。のみならず、去年（弘安元年）からの雪で路も絶えたから、年が改つたと訪ひ来るものは、鳥の外にはない。餘程友情に厚い人でなければ、誰が来るものかと心細く暮し

てゐた處に、元三（三ヶ月）の内に送られた餅九十枚は満月の如であるから、心の中も明かになつて、この世の間も晴れると思ふ。誠に見事なものである。……（日語譯全集に依る。以下之に依る）

は先づこの一篇なのであります。

三、弘安三年の新春（壽五九）

これに就いては私がつたない贅註を加へるまでもなく、餘りに乏しい御有様にたゞ驚かれるばかりであります。勿論、不便な深山の中であつてみれば、我々の所謂お正月なるものとは、餘程の相異のある可きは元よりの話でもありませんが、何にいたせ新春早々已にこんなであらうとは、一面に於いて、上人御人格の最高性を認め、従つて御生活環境も總べてこれに準ずるものと遂に思込んで了ふ者には、鳥渡想像し得る處ではありません。日附は正に新年の三日でも、なごやかなるべき豊かな新春気分は、更に見出し得られない御書です。但し、それは飽くまで表面上のことなので、上人の御内面までが斯くも寒むざむしいと云ふのは、露、ありませぬ。併し假令、表面上だけのことでありませうとも、上人——末法の大導師、日蓮上人にして年頭かゝる御有様とは、衷心からいたますには居られぬではありませんか。同時に、晴れやかな新年を迎ひ得る、上人の流れをくむ私共は、大いに慥懺たらざるを得ません。

此の上野殿御返事に續くものは、二月三日附の可延定業書（縮遺一八二六）ですから、弘安二年の春を知る可き材料

身延御入山後の第六春です。此の年最初の御文章は、一日附の矢張り上野殿御返事（縮遺一九二八）であります。上野殿の新年供養に對して酬ひられた短い御消息です。十字六十枚、清酒一筒、薯蕷五十本、柑子二十、串柿一連、送られて辱ない。正月三箇日の御備物として法華經の御寶前にお飾りした。花が開けば果となり、月が出れば盈くなる。燈に油を注げば光は増し、草木は雨が降れば繁る。人の善根も積めば蛇と榮えるに違ひない、その上この元三の御志は元一にも超え、十字は満月のやうに美事である。委しいことは又々申しあげるであらう。以上はその全文です。新年の賀詞をありませんが、法華經の御寶前、開く花、まるい月、光の増した燈、繁つた草木、榮える善根——等々と如何にも好ましい道具建で、前年の第一書とは違つた、初春らしいおほらかな感じを受けます。かゝる新春であつてこそ、日蓮上人の御迎へなさるに充分ふさはしいものではないでせうか。尤も、前年の春だとして、前にも鳥渡書きましたやうに、乏しいのは表面上だけの事なので、上人の御内面に至りましては、法悦に輝くうるはしい年を御迎へになつたのでせうけれど、

御入滅後已に數百年後の今日、御遺文を何よりの手がかりとして、上人に親しむ私共には、これ等の御文章より察して、何と云ふ深いわけもなしに、前の春よりは此の年の春の方に、どこもない暢びやかさや明るさを多分に見出し得るやうな気がしてならないのであります。

處が、この正月に先立つタツタツ三日の弘安二年十二月二十七日附の上野殿御返事（續遺一八九一）は、折角明るく感ぜしめた新年に一抹の暗さを投げかけて居ります。前の年の十二月二十七日の記事なら、正月と一連にして扱つてもよいかと思はれますので、その一節を出して見ます。

……國の上下萬民に憎まれて、結局はこの山中（身延）の身となつた。この上は天が何とお計らひなされるのであらうか。元來往復に困る山道に、今は五尺からの雪が降つて訪ねて呉れる人もない。衣物も薄いから、この寒さは防ぎきれない。食物も無くなつて、今は餓死しようとして居る處へ（命さまたげの）この送物は、一つは悦びであるが、一つは却つて歎けしい。今消えやうとして居る燈に、油を注がれたやうなもので、尊い思召しである……

この上野書は、年末に當つて同氏が白米一俵を御供養申上げたの對して感謝されて居るので、雪に降り込められた山中の御窮狀を主として書いておいでになります。御様

る。(二、身延の河)この山の外を廻つて四つの河が流れて居る。北から南へ流れて居るのは富士河、西から東へ流れて居るのは早河で、それは後に當る。前の方に西から東へと流れて居る波木井河の中に一つの瀧がある、それを身延河と名ける。その光景は、中天竺の靈鷲山をここに移したやう、將た支那の天台山がこゝへ来たやうに思はれる。(三、山中の御生活)この四つの山、四つの河に圍まれて、手の廣さ程の平かな處がある。そこに庵室を結んで、雨露を凌ぎ、木の皮をはいで壁とし、自然に死んだ鹿の皮を衣とし、春は藪を折りて身を養ひ、秋は果を拾つて命を支へて来たが、去年（弘安二年）十一月から雪が降り積つて、今年の正月になつても絶えることもない。庵室は高さ七尺であるのに、雪は一丈も積る、丁度四方は氷の壁で、軒にかゝる氷柱は道場を莊嚴する瓔珞の玉のやうである。庵室の内にも雪は米のやうに積つてゐる。従つて訪ねて来る人も稀である上に、雪が深く道が塞がつてゐるから、訪ねて来る人も尙更になく、この世に八寒地獄の業を償ふやうである。……

一讀して、大自然の重壓を感じることが出来ます。峽巖たる深山の中に、ボツンとたゞ一點を落したやうな小さな草庵、上人は此の中で物資の窮乏に加ふるに、大自然の威壓に對しても争はれねばなりません。寒いと云ふ

子は察するに餘りあります。それに物資の缺乏に加へて、身延の山の自然がどんなにか、上人を御苦しめたかは、右の短い文でも略想像出来るのであります。「元來往復に困る山道に、今は五尺からの雪」私共の想像の視野を、この雪の降り積む山道から更に擴大して、白皚々たる身延全山に及ぼし、次には山間に結ばれたさゝやかな御草庵に牧めらすなら、身延の自然がどれ位、日蓮上人の上に激しくのし掛つて来たかと、尙一層明瞭になつて参ります。

その意味では弘安三年度の第二書たる秋元御書、一名筒御書抄（續遺一九二九）は、大自然の中に生活なさる上人を、上人自らよく描いて居られます。秋元御書は一月廿七日附で、上記の十一日附の上野殿御返事に次ぐのであります。他の御書を引用いたせば、もつと適當なものがないでもないやうですが、私は今、年頭の、上人を知るために、成るべく新年に近い御書を探ぼうとしてゐるので、敢へてこの秋元御書を取つた次第なのであります。括弧内は、読み易からんがために、私に試みました。

……(一、身延の山)この山の有様を申すならば、日本國七道の内の東海道、その内の甲州飯野、御牧、波木井の三箇郷の内の波木井の成亥の方に二十餘里の深山がある。北の方は身延山、南の方は鷹取山、西の方は七面山、東の方は天子ヶ嶽で、丁度板を四枚立てたやうであ

だけの事なら、佐渡四ヶ年の冬などは實に並大抵のわけではなかつたでせう。しかし、身延のそれは、較ぶべくもなかつたと存じます。なぜなら、大自然の威するあらゆる種類の猛威は、この山中にあつて始めて充分な力を發揮してゐるからであります。上人御在住當時の身延は、現在の俗化せる身延とは全然違ひます。山又山の山間に、「手の廣さ程の平かな處」を切り折いて、「そこに庵室を結んで雨露を凌ぎ」給ふたのでした。日蓮上人と身延とを考へ合せる上に於いて、大自然の重壓なる一項目は、必ず忘れてはならぬものでありませう。然るに、親しみにくい上に底氣味悪くさへある山の自然が、日蓮上人の御眼には情緒深く美化されてゐたのでした。前文三の項を讀めば、上人の宗教眼によつて美化された、山の自然を思ふことが出来ませう。私はその點に就いて日頃感ずる若干を書き加へたいと思ふのですが、年頭の、上人を知る上には問題が自ら達つて來ますし、又相當長くもなりそうですから、今はたゞ押し加へさつて來る身延の自然が、凌ぎにくいまゝ一面には上人にあつて美化されてゐたと一言書き加へて、詳しくは他日を期したいと望みます。

此の年の第一書に直ぐ前後する二篇の御書によつて、物資の不足、自然の強壓等を思ひ合せて参りますと、一往は明るいと思はれた弘安三年の新春も、結局は又、暗い蔭

影の伴なふ正月となつて了ひます。

四、弘安四年の新春（巻六〇）

身延第七春。此年も亦、上野殿への御消息（繪遣二〇四七）に御筆が起されて居ります。上野氏の新春供養に對する御挨拶です。

清酒一筒、饂飩十個、十字百枚、蛤一桶、白米、柑子一籠、申袴十連、送られて忝けない。それに初春の喜びは花のやうに開け、月のやうに圓く満つるとの賀状も正に拜見した……

この御書には、別に申すべき程のこともない様です。又これに續きますのは、三月に遣入つてからの御文章なので、弘安四年の新春に就きましては、これと云つて覗ふに足る資料がない如く存せられます。

五、弘安五年の新春（巻六一）

身延第八春。日蓮上人は、この年の九月に御離山なされ、十月池上で御入滅になつて居りますので、弘安五年の新春は終に此の世での御最後の春となつてゐるのであります。弘安五年年頭の御書を拜讀いたす時には、一信者として常に無量の感慨に迫られます。毎年の第一信が、きまつたやうに、上野殿でありましたのに、今年は珍らしく七日附

の因縁でありませう。今、その大部分を引いてみます。段落は私につけたものです。

（一、賀詞）新春の悦びは、木に花の咲いたやうに、山に草が萌え出たやうに、我れも人も御同様に芽出度いことである。（二、供養感謝）偕て御送り下された品物の日記、米一俵、鹽一俵、十字三十枚、芋一俵、隨に受納した。（三、山中窮狀）こゝは深山であるから三日も雪が降り積くと、庭には一丈も積り、谷は峰になり、峰は天に梯をかけたやうである。鳥や鹿は訪ねて来るが、樵牧の姿は一向見えない。衣服は薄く食は乏しく、夜はまるで雪山の寒苦鳥のやうである。この鳥は雪山の夜寒にせめられて、夜が明けたらば巢を作らうと嘆くと聞くが、我もその様に、晝になつたら里へ出よう出ようと云ふ心が絶えず起る。（四、懺悔御求道）斯んなに讀經の聲も断れ、観念する根氣力も薄くなつては、今生の修行が怠り勝ちになるから、復三千塵點、五百億塵點劫程の永い間、生死輪廻せねばならぬことであらうと、嘆いて居る所へ、この御供養に命も生き返り、復御目にかゝることが出来るかと思ふと、洵に嬉しい……下略。

通覽して先づ氣付くのは、矢張り山中の御窮狀です。自然力の重壓です。そして御自身を雪山の寒苦鳥にまで例へておられます。御最後の春がこんなとは、全くいたまらずに

で四條金言殿へ御たより（繪遣二〇九一）になつて居ります。満月のやうな餅二十枚、甘露のやうな清酒一筒、有りがたく受納した。初春の悦びは、月の満つるやうに、草の茂るやうに、又雨が降つて草木の萌へ出づるやうである……

全く初春らしい御言葉であります。日蓮上人、年頭の御氣持は、物資が乏しからうと、自然が壓しかつて來ようとそれ等には決して支配されずして、常にかくもあつたのでありませう。此の御書は、一名八日講御書と云はれます如く、四條氏が釋尊御降誕の八日講を修してゐるのを隨喜なされましたもので、内容には年頭の御自身の御生活には一更觸れてをられませんか、今の私の目的のためには初めの御賀詞の外はこれと云ふ箇處もありません。

扱、右の御書に次いで正月二十日には、上野殿へ書いておいでになります。普通、春初御消息（繪遣二〇九二）と呼ばれておりますが、新春の御書の内、これ位年頭の上人を祝ふに適切な御遣文はありません。此の拙文の冒頭に書き出して置きましたやうな春の御ことばに始まつて、餘り長くない一篇に山中困苦の狀を陳べられ、更に懺悔求道の内生活をまで、潤ひ深くお書き遊ばされて居るのであります。今生御最後の新年に、年頭の御心境やら環境やらを最も要領を得た筆致でお残しなされてゐるのは、何か

は居られません。寒苦鳥に比して後、「我もその様に、晝になつたら里へ出よう出ようと云ふ心が絶えず起る」とありますが、これは、上人が堪へ切れぬ寒苦から終に里を戀された文字面通り拜して、自然主義文學風に、上人の凡夫としての弱さ、脆い人間としての生活破綻と解してよいものでせうか。歌人や詩人が我れと自ら山中に隱遁しながらも、尙、懐へ切れぬ孤獨感から人をこひ、市を慕ふたと云ふやうな憂悶と同一視してよいでせうか。御文章の上では、たしかに寒さの餘りに酷しいが故に、暖い里を戀されてゐるのです。又、實際そう云ふ御氣持が、御心のどこかには時に湧いたのかも判りません。併し、この文面を以て上人の肉體的弱さをサモリ、發見したかの如く、得々として強調するのは如何かと思はれます。一つこの場合に限らず、かゝる種類の御文章は餘程注意してかゝりませんと、兎角に當方のつたなさを以て、上人を己れ間近かに引き下して了ふ危険が伴ひます。二往にも三往にも、よく熟考して文字の内に籠められた少しでも眞意に近いものを、味ひ取るのが肝要だと存じます。さもないと、己れに都合のよい解釋を加へて、上人ならざる、上人を捏つち上げ易いのであります。では、こゝの處をどう味つたらよいかとなりませんが、恨むらくは現在の未熟な私輩には、どうともハツキリ申し切れません。日蓮上人のそれには遙かに遠い心しか

持たぬ私などには、到底不可能であります。聖なる心意は、聖なる心意の所有者にのみ理解いたされます。私には、ただ、こゝを通り一べんに讀む可きでない、決して單なる生活破綻ではないと、消極的な言明が許されるのみなのであります。聖筆の眞意をヨリ進んだ心境でヨリ的確に握る可く、模範人格たる日蓮上人の御心境へと、果敢ない己れを僅かでも接近せしめんと、一歩々々精進の歩みを續ける處に、御書拜讀の意味があるのではありますまいか。そして鑄ては、上人の御氣持も隨ながら判るやうになり、御書の精神も不完全ながら汲み取れる時が参りませう。その時こそ、現在のおろかしい己れが、自ら見違へる程に進化してゐる時なのでせう。私は、消極的の云ひ方しか出来ぬのを遺憾とは存じません。つとめて行くなら己れの内容も充實し、いつかは積極的な理解も出来ようとして喜んで居ります。聖意は、そうたやすく握めるものではないのでせう。宗教的天才の深い研讀と、長いけはしい體驗とに依つて到達した心境が、研讀にも體驗にも、それらしいものを持たぬ私如きに、そう安々と握れるものでないのが當然であります。上人が里を慕はれた御心持をどう解釋いたせうと、別段大した問題でもないやうですが、併し又考へやうによれば、これに依つて、上人の全人格を一信者として偲ぶ上に、幾分の變動も生じて参りませうから、決して簡

單に看過すべきではないと思はれます。

(四)の項下には、懺悔御求道を他の諸御書に於けるが如きあからさまにはなく、意を文の中に曇み込む文章上の最高技巧を借りて御述べて居ります。文章の上では修行の意りがちになるのを嘆かれて居りますが、事實はこれとは反對に、いよ／＼と御精進なされてゐたのは申すまでもありますまい。上人にあつては、生活上の困窮が自棄への階梯ではありませんでした。それは、次の一段と眞摯な御求道への拍車だったのでした。

弘安五年の新春は、前年までの一種の暗い氣分の漂ふ初春とは違つて、寧ろ悲壯な感じのいたす正月であります。生活と自然との壓迫の中に、盡きることのない求道又求道、精進又精進が約されてゐるのです。正に悲壯と申すべきでありませう。春初御消息は、又、年頭の 上人をよく物語るのみならず、全日蓮上人をも如實に示してゐるやうであります。上人の御一生は、苦難の裡に敢然と前進を続けられ通したのでした。此の御書は、その苦難の裡に前進を、まざ／＼と語つてはゐないでせうか。春初御消息を通じて拜する 上人御最後の新年は、日蓮上人の多難の裡に御精進なされし御生涯を、さながらに壓縮したやうな、悲壯にも緊張したものであつた如くであります。

六、後の言葉

日蓮上人の御迎へなされし初春は、表面だけではどう考へましても、常日頃と同様、餘り豊かではないやうでありました。新春だからと云つて更に遠慮をしない自然の重壓と、得て御不足勝ちな御生活とを、拜するのみであります。自然の重壓は普通人の仲々堪へ得る處ではありません。又、普通人がかかる自然に遭遇する時は、むきになつて對立して、それと相争ふ心構へになり易いのです。上人は、そんな道を選ばれませんでした。自然と相抗せんとはせず、一如されたのでした。肉體的には凌ぎ難くとも、精神的には融合されてゐたのであります。かるが故に、威壓して来る自然が、ふくよかに美化もされたのでした。日蓮上人は詩人ではありません、宗教家だったのでした。詩人ならざる宗教家が、自然と一如したとは、鳥渡受取りにくいですが、詩の世界も畢竟は宗教の世界に至つて、終には最高潮に達するのですから、徹底せる宗教家の澄んだ心境が、期せずして自然と一枚になり得るのも、蓋し當然であります。詩人の方こそ、宗教の門に來ねばならぬのです。かくて、上人は自然の重壓を處理なされたのでした。次に、生活上の御不足は、信者方の心づかひに依つて、不充分乍ら常に補はれてゐたやうであります。この處なども、今少し詳しく

申し述べたい數々があります。

自然と生活との御困難は、何も年頭に限つたことではありませんから、これ等を新春に當つて特別取りたてて考へる要はない位です。日蓮上人御迎春のさまは、何と云つてもその年頭に際しての御心境に求むべきなのでせう。處が、前に已に申した通り、この點が最も理解に困難を覺えるのであります。未熟な者がウツカリ手をつけますと、飛んだ冒瀆を犯す事になります。たゞ、上人にあつても矢張り出度く御迎春遊ばされしことゝは信じられます。そして、改年の第一歩は、年と共に新たなる發刺とした求道への御出發だつたのでせう。肝心の問題が、こんな程度しか判らぬならば、何のためにも／＼しい標題を初めにつけたのとなりませんが、年頭の御有様をどんな僅かでもうかがひ知り、以て 上人讃仰の念を新にし、兼ねて新春反省のたよりにでもいたそうと、觀點を 日蓮上人よりは寧ろ己れの向上に役立たせんとする方に置き、暴暴を試みたのであります。至らぬ頭で、日蓮上人を讀したるなきやと懺悔いたします。上人を知らんには、人々に直接御遺文を手にする外はありません。今、私は私なりの 上人を、制限ある紙數内に少しばかりしたるに過ぎませぬ。以上が、年頭に於ける 上人の動かぬ御姿だなど申すのでは、毛唐ないのであります。

最後に、元政上人の 高祖讚二篇を擧げて、撰文のせめてもの願にいたしたいと望みます。

末法の導師、人天の眼目。

竺乾に稟承して、日域に敷揚す。

格外の教意、豈に繩墨に泥まんや。

手に經拂を執て、諸宗を護す。

補處夜の菩薩も也た護らず。

○

靈山の別付、獨り濁末を濟ふ。

險危を蹈過して、死せんと欲して復た活す。

塵尾、雨濯ぎ、咽音、雲邊る。

諸天龍神法を聽て感湯す。

如何んが讚せん、如何んが讚せん。

南無本化上行菩薩。

誌上御挨拶

有難いことにはおかげ様で團務が
日毎に激増大繁昌致しまして、毎
日未明から深夜まで無休に健闘を
續けて居りますが、それでも及び
ませぬので、自然歳末年始の禮を
缺くやうになる惧れがあります。
何卒御諒察御海容の上、爲法國倍
舊の御高援を偏にお願申上ます。

丙子臘月

恐恐

儀部 滿 吏

開目鈔講話

(第四講)

小林一郎

而ども天を極る者は、永くかへらずご
おもへり。各々自師の義をうけて堅く
執するゆへに、或は冬寒に一日に三度
恒河に浴し、或は髪をぬき、或は巖に
身をなげ或は身を火にあぶり、或は五
處をやく、或は裸形、或は馬を多く殺
せば福をう、或は草木をやき、或は一
切の木を禮す。此等の邪義其數をしら
ず。師を恭敬する事、諸天の帝釋をう

やまひ、諸臣の皇帝を拜するがごとし。

さういふやうに婆羅門といふものは、佛教に比べ
ると、自分の私を捨てるといふ考が無いものである
から、幾ら物を知つても、それでは本當の覺りとい
ふやうなものを得られない譯です。「而ども天を極
る者は永くかへらずとおもへり」佛教以前の教は
各々これで満足して居たのです。さうして「各々自
師の義をうけて、兎に角銘々師があつて、その自分
の師匠から習つたことが善い事と思つて、堅くそれ
に執著して一生懸命になつて修行をして居る。だか

ら或る人は冬の寒いのに一日に三度も河の中に入つて、所謂難行苦行をやる。これは何故そんなに苦しい思ひをするかといふと、この世で苦しい思ひをして我慢をすれば、その報いとして後の世は天上に生れるといふやうなことをズツと前から教へられて居ります。それで難行苦行をやるのである。今でも印度でさういふ事をやつて居る者があるやうです。併しこの頃はモウ眞面目ではないので、人に見せる爲にやつて居るやうなのが多くなつて、ホンの形式的のものになりましたが、昔は婆羅門でも随分さういふ事を眞面目にやつたらしいのです。

それで河に入るとか、或は髪の毛を抜くとか、或は巖に身をぶつけて痛い思ひをして我慢をするとか、或は自分の身を火に焙る。これは今でもやりますが、掌に香みしたいものを載せてそれを焚いて居る。そんなのもあつて、いろ／＼苦しい思ひをするのです。「或は五處をやく」五處といふのは兩手と兩足

限りのないくらゐのことである。併ながら感心なことには、自分の師匠を敬つて、ちやうど天上界の者が帝釋天を拜むやうな風に敬つて居る。又家臣が皇帝を拜するが如く師を敬ふといふことはやつて居る。

しかれども外道の法九十五種、善惡につけて一人も生死をはなれず。善師につかへては二生・三生等に惡道に墮ち惡師につかへては順次生に惡道に墮つ。

併ながら外道は九十五も派があるといふけれども、その中に善いのもあれば悪いのもあり、いろ／＼あるが、一人も生死を離れることが出来ない。生死といふのは人生の差別を言ひます。たゞ生きる死ぬだけではない。生きる死ぬといふことは一番目立つことですから、それで生死といふ言葉で人生の差別を

と頭どの五處を焼くのです。焼くと言つてもお灸のやうなものです。それもやはり一種の苦行です。それから裸になつてそこに立つて居るといふやうな事をやる。或は馬を多く殺せば福を得るといふやうなことを言ふ。これはどういふ言ひ傳へてありましか、印度では牛は大變大事にする。牛は決して殺しませぬ。牛の乳は飲むけれども、牛の肉は食へない。ところが馬の方はどうも粗末にする、これはどういふ理由か能く判りませぬけれども、今でもさういふ傾向があるやうであります。それで馬を殺すといふことに依つて却て後の世は福を得ると言ふ。實に馬鹿な話であります。そんなやうな言ひ傳へに依つて修行して居る者もある。或は草木を焼いたり或は木を拜む。これは何處の國にもあることでありまして、石だの木だのを何か魂が籠つて居るものゝやうに思つて拜みます。

「此等の邪義其數を知らず」それは數へ立てれば

表はして居るのであつて、例へば

生一榮、盛、利、得、勝

死一枯、衰、害、失、敗

斯ういふやうな人生のいろ／＼な區別です。或る者は榮え、或る者は枯れ、或る者は盛になり、或る者は衰へる。或る者は利益があり、或る者は害がある。或は得るとか失ふとか、勝つとか敗れるとか、斯ういふ一切の事を「生死」といふ言葉で假に表はして居るのであります。人生の總ての差別を言ふ。これはどうも人生にいろ／＼な變化のあるのは已むを得ないけれども、その人生の變化があるたびにそれで心が執はれて居つたのでは、一日として安かたこととはあり得ない。少し儲ければよい氣になるし、損が行けばガツカリしてしまふ。勝つた時には心が驕つて敗けた時には泣き出すといふやうな遣り方をし居つたのでは、人生といふものはまるで安らかになることはない。だから佛教ではそこを教へるので

す。どんな境遇の中でも境遇に負けないやうな心持にならなければいけない。勝つたからといって無暗に驕つてはいけない。敗れたからといってガツカリするには及ばぬ。金が儲かつたからといって有頂天になつてはいけない。損をしたからといって腰を抜かしてはいけない。どんな境遇の中でも平らな本當にしつかりした心持を以て通つて行かなければならぬといふことを佛教では教へるのであります。ところが婆羅門ではそれを教へない、それだから幾ら智慧があつても智慧だけで覺りは開けない。少し工合が良いと自惚れてしまふ、少し工合が悪いと直ぐにガツカリしてしまふといふやうなものである。これを生死を離れないと申してあります。

さういふやうな婆羅門といふものも随分榮えては居りましたが、結局それは惡道に墮ちるやうなことになる。「善師につかへては二生・三生等に惡道に墮ち」縦ひその師匠が善い者であつても、今言ふ迷

ひを捨てるといふことをしないから、二度か三度か生れ更なる間には、又地獄とか餓鬼とか畜生とかいふやうな情けない境界に墮ちるだらう。又「惡師につかへては順次生に惡道に墮つ」惡い師であれば、生れ更つても生れ更つても、いつでも惡道に墮つて、心の苦しみや惱みを離れることはない。

外道の所詮は内道に入る即最要なり。或外道云く、千年已後佛出世す等云々。或外道云く、百年已後佛出世す等云々。大涅槃經に云く、一切世間の外道の經書は、皆是佛說にして外道の說に非ず等云々。法華經に云く、衆に三毒有りとし又邪見の相を現す。我弟子是の如く方便して衆生を度す等云々。

けれど、そこからだん／＼修行して行くと、その外道即ち婆羅門の結局は内道即ち佛教に入る準備的のものにはなる。それは修行をしなければならぬといふことは教へられるので、又自分の師を敬ふといふやうなことも教へられるから、婆羅門の教だけで止まつてはいかぬけれども、それで修行して行つて、その次に佛教を習へば、さうすれば婆羅門の修行でも佛教に入る手引にはなる譯です。それで又婆羅門の先生の中には、今は佛は出ないけれども、千年も経つたら佛が世の中に出られるだらうなどと言つて居る者もあり、又或る外道は今より百年経つた後に佛が世の中に出るだらうナンと言つて、佛の世の中に出られるのを待つて居るやうな者もある。

それから大涅槃經といふお經の中には「一切世間の外道の經書は、皆是佛說にして外道の說に非ず」といふことがある。これは大變に大きい心持です。佛の教といふものを廣い意味で言ふと、有ゆる善い教といふものは皆その佛の教の中に包容されることが出る。それは佛の教の一部分である。私共が大なる事一つ捉まへて、例へば法華經を信するといふやうなしつかりした心持を有つて居りますと、その信仰を助ける爲に佛教以外のものでも皆役に立つのであります。心の中心がしつかりしないで、あれこれ習つて居つたのでは少しも役に立ちませぬ。心の信仰がしつかり困まつて居れば、どんな教でも相當に役に立つて行くものであります。それからさういふ意味で言つて居る。佛教といふものを本當に習つてそれから行くと、外道の婆羅門の教でもやはり役に立つ。それはやはり佛の助けをなすものである、佛の信仰の或る補ひをなすといふことは言へるのであります。だから佛教以外のものだからといって、まるで愛想をつかして捨てるには及ばない。自分の心の土臺さへしつかりして居れば、有ゆるものが皆役に立つて来るのだ。斯ういふ事を

涅槃經の中に言つてあるのであります。又法華經にも、お釋迦様は或る時には佛と成つて世の中に出て教をお説きになることもあり、或は化身と言つて、佛でない相対世の中に出て教をお説きになることもあるといふ風に言はれてるのであります。自分の信仰がしつかりと立つて行きますれば、有ゆる教が皆役に立つて来るのであります。さういふ風に廣い心持を有つべきである。併ながら心の中心になるものは本當に善いものでなければならぬ。「どれでも宜いや」といふやうなことではいけませんから、しつかり一つ決めて置きました、さうして他のものは又その信仰を助けるものとして行けば宜しい譯であります。

それだから法華經の中にもさういふ事があつて、「衆に三毒有り」と示し又邪見の相を現す。我弟子是の如く方便して衆生を度す」といふ事がある。これは場合に依れば人に教を説く時に、自分も三毒が有るもある。斯う言つて態々他の者を教へ導くといふこともある。「我弟子」佛様のお弟子の中でも殊に徳の高い人、又大勢の人を教へ導く親切の心持の有る者は「是の如く方便して」いろいろ方法で以て大勢の人間を教へ導く場合もある。斯ういふ事が言つてある。さういふ譯だから教といふものはまるで價値の無いものはない。佛教の本當の信仰をしつかりと固めてから後ならば、どんな教でも役に立つ、又どんな態度でも相手を教へ導く方法手段といふものはさまざまにある譯であります。

これで支那の孔子の教と、又印度の佛敎以外の婆羅門の一通りを済ませました。これから第三のお釋迦様の教といふものに入るのであります。

三には大覺世尊、此れ一切衆生の大導師・大眼目・大橋梁・大船師・大福田等なり。

四六

るといふことを示す。三毒といふのは貪るのと瞋るのと愚痴で、所謂貪瞋痴でありますが、大勢の人間に、相手に依れば「お前は迷つて居る、自分は覺つて居る」ナンと言つたのでは寄りついて来ない。だから「私もどうも腹が立つて困る、私も慾張る心持があつて困る、私もどうも考が足らない、だから一緒に修行しようぢやないか、あなたも迷つて居るだらうが私も迷つて居るから、一緒に手を携へて佛の道に入つて修行しようぢやないか」といふやうに、相手と隔てないで、さうしてこれを導くといふことが非常に必要である。それが「三毒有り」と示す」といふことで、「自分も迷つて居ります」と言つて一緒にやる。さうすると向ふでも快い氣持で、「それでは一緒にやらう」となつて来る。それから又邪見といつて自分の考が間違つて居ることがある。場合に依れば、自分も佛の教を學んで居るけれども、まだまだ修行が十分ではないから、いろいろ間違つた事

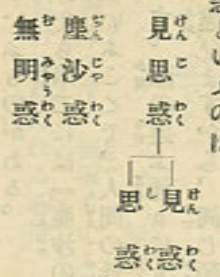
四七

そこで第三の一番上のものは、大覺世尊、お釋迦様である。お釋迦様が一切衆生の大導師であり、大眼目であり、大橋梁であり、大船師であり、大福田である。大勢の人間を教へ導くはたらきをする方である。又人間に眼がなければ物が見えないやうに、佛様の教といふものがあると、その教を眼として眞實の事を見て行くことが出来るのでありますから、ちやうど佛様が世の中に居らつしやるといふのは、人間の身に眼があるやうなものである。或は又橋があればどんな深い河でも湖でも渡れる。佛の教といふものを頼りにして行けば、どんな苦しい中でも、どんな迷ひの中でも渡つて大きな覺りが得られるのでありますから、佛様は人間の橋のやうなものである。或は又船に乗れば海の向ふにでも行けるやうに佛の教といふものに寄り絶つて世の中の海の中を渡つて行きますから、佛様はちやうど船頭のやうなものである。又福田といつて人間の福を生み出すこと

ろの根本は佛様である。これはナニモ珍しさうに言ふまでもありませぬけれども、人間が世の中の物質的の満足に依つてのみ本當の幸福が得られるものでないといふことは、少し考へて見れば解るで事す。例へば貧しい者は「金が有れば幸福だ」と思ふ、併ながら世間の金を有つて幸福でない人は幾らもある。有れば有るほど却て累ひを起す人もある。身分の低い人は「出世したら幸福だ」と思ふけれども、身分が高くなればなるほど、人に憎まれたり、嫉まされたりして、不幸な者もあるのですから、心の持ち方を直さなければ、周囲から幸福といふものは與へられるものではない。それで佛の教を學んで自分の心の持ち方が直つて、迷ひだらけの心が明るい安らかな心持になつて居れば、金が有つても幸福だけども、無くても幸福であります。身分が高くても幸福だが、低くてもそこに安んじて行かれる。そこを一つ根本から考へなければならぬ譯であります。だ

生死の大海をわたるべしや、彼を橋として六道の巷こえがたし。

外典といふのは、こゝでは支那の孔子や老子の教のことを言ひ、外道といふのは今申す印度の婆羅門のことを申すのであります。四聖は前に申したやうに支那の聖れた人を四人算へられてありました。それから三仙といふのもこの前讀んだ所にありましたやうに、印度の婆羅門の中の殊に勝れた人でありま



から佛の教を學んで初めて眞の幸福といふものが得られる譯です。家中でもさうです。親子、兄弟、夫婦、仲が好ければ、金が有れば無論幸福だが、貧乏でも一緒に慰め合つて耐へて行けば耐へられる譯です。ところが家中の心が離れ々々になつて居つたら、どんなに金が有つても、どんなに生活が立派でも、それは逆も本當の幸福といふものはないでせう。だから佛の教が福を生み出すので、ちようと田地に稻が生えるやうに、佛の教の中から本當の幸福といふものが生み出される。それで佛様のことを福田と申します。一切の人間の幸福を生み出す本だといふのであります。

外典・外道の四聖・三仙、其名は聖なり
こいへども實には三惑未斷の凡夫、其名は賢なり
こいへども實には因果を辨へざる事嬰兒のごとし。彼を船として

を申すのでありますが、第一の「見思惑」といふのは、凡夫として有つて居る迷ひです。「見」といふのは物を考へることで、物を見たり聞いたり、本を讀んだりする間に自然に起つて來る迷ひ、それが見惑で、自分勝手のことを考へる。本を讀んでも自分の都合の好い方ばかり見て、自分の都合の悪い所は見ないといふやうな風で、物を見たり聞いたりする間に小さい自分に執はれてしまつて、眞實の事を見ることが出来ない。これが所謂「見惑」であります。それから「思惑」といふのは、日々の行ひの上に現れて來る迷ひ、或は貪るとか嫉むとか、憎むとか腹を立つとかいふやうなことで、これは始終自分の心に起ります。それを兩方併せて「見思の惑」と言ふ。物を見たり聞いたりする時の迷ひと、それからいろいろな行ひをする間に起つて來る迷ひは、これは凡夫としての迷ひです。本當に佛の道などを心得ない、たゞ出鱈目の生活をして居る者はいつでも見思

の或といふものがある。

それから第二には「塵沙の惑」塵や沙といふのは澤山といふことで、人間の性質境遇、それ／＼皆違ふのです。顔の違ふ通りに人間の性質といふものは幾らか違ひますから、同じ顔をして居る人は居ないと同じやうに、同じ心持の人はない。それを察してやらなければいけない、その察しが足らないのを塵沙の惑と言ふ。人さまざまであるといふことに気が付かないで、自分流儀に總てを解釋して、人に對する察しが足らない、これが塵沙の惑であります。これもどうも吾々共は始終あることであります。解つたやうでなか／＼解らない、人の心を本當に知るといふことは難かしい、それだから立場が變るといふと解らなくなつてしまふ。私は自分でいつでも同じ間違ひをして恥かしいと思ふのですが、私は新宿の向ふの方に住んで居る。朝急いで家を出て新宿から電車に乗る。ツイ朝寝をすると慌て、新宿のステー

仕様がな、カフエーなどに入つて居る、僕等が學生時分には一度もカフエーなどに入つたことはない……」ナンと言ふけれども、考へて見ると、僕等が學生時分にはカフエーは無かつたから、入らないのは當然です。そんな事は忘れてしまつて「この頃の若い者は……」とやる。若い方は若い方で「どうも家の親父は頭腦が奮くて仕様がな」と言ふ。自分だつて今に奮くなるのだけれども、そこは氣が附きはしない。さういふやうに皆執はれる、執はれるから人に對する察しがない。察しのない人同士が集まつて居るから衝突の絶間がないといふことになる。それで人々の性質境遇が皆違ふのでありますから、その違ふのに對して思ひ遣りがないといけない。それが塵沙の惑です。

それからモウ一つは「無明の惑」と言つて、これが一番根本です。無明といふのはどういふのかといふと、自分に執はれる心持、これが無明です。「俺

シヨンの階段をトットと駆け降りて電車に乗る。さういふ時に前をブラリ／＼歩いて居る人があると、不愉快です。「ナンダ、俺は急ぐのにぐ／＼して居て……」突き退けて行きたくなる。ところが夜遅くなつて家へ歸る時には、モウ家へ歸るだけですから自分がブラリ／＼とホームを歩いて居る。すると後ろから來て私を突き退けて行く者がある。「怪しからん、なんでそんなに急ぐのだらう」と思ふ。洵に恥かしいことで、今朝自分のやつた事をやられるのですけれども、ついさういふ氣になる。こつちが急ぐ時にはブラリ／＼して居る人が癪に觸る、こつちがブラリ／＼して居る時には急ぐ人がどうも氣に喰はぬ。斯ういふことになる。それだから人に對する察しといふものが出来はしない。自分が年取つて居ると若い時の事が解らない。自分が若いと年寄りのことは解らない。だから吾々ぐらゐの年になると「若い奴は生意氣だ、どうもこの頃は學生が贅澤で

が……」と斯う思ふ。人を教つても、人を教へても「俺が教へてやるのだ」と思つて居つては本當に救へるものではない。「俺は可哀相だと思つたから救つてやつたんだ、有難いと思ひさうなものだ」と思つて居ると、向ふが禮を言はないと腹を立て、しまふ。「俺が教へてやつたんだ、覺えが悪い。どうも怪しからん」斯ういふことになる。それは自分といふものに執はれて居つては、縦ひ人に善い事をしても徹底的に善い事は出来ない。却つてその恨みを起す事になる。人に物を恵んで置いて「彼奴は恩を知らない奴だ、禮を言はない」と言つてブン／＼怒つて居る。そのくらゐなら結局やらない方が宜い譯であります。結局自分といふものに執はれる。さうするも、結局世の中の人を本當に教ふ譯に行きはしませぬ。その自分に執はれるといふことはサラツと捨て

なければならぬのでありますが、これはなか／＼難かしいことで、佛様でなければ本當に此處まで行かないかも知れませぬが、マア努めて怠らなければ幾らかづ／＼さういふ迷ひも無くなるでせう。

さういふやうに三いろの迷ひがあります。これを三惑と申します。いろ／＼學問があつても佛教を本當にやらない者は「三惑未斷」で、まだその迷ひが無くならないものである。

だからさういふ人は、名前は賢人だ、聖れて居ると言はれるけれども、實は因果を辨へない、原因結果といふことを能く考へない。それは何故かといふと、人間の生命をこの世だけだと思つた日には、本當の因果の關係といふことは解らない。この世で善い事をして幸福の無い者があり、碌な事をしなくてもかなり樂に暮して居る者があるでせう。それだからそれをいろ／＼見たり聞いたりすると馬鹿々々しくなつてしまふ。あつちの方には正直にして居つ

つて行くといふことは出来さうもない。又さういふ佛よりもモツと劣つた人を橋として、さうして六道の巻を越えることは難かしい。六道といふのは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上界といふやうなさまざまな境界でありまして、その中を吾々は始終ぐるぐる廻つて居るのですが、その六道を越えることは難かしい。

我大師は變易猶わたり給へり。況んや分段の生死をや。元品の無明の根本猶かたづけ給へり。況んや見思枝葉の塵惑をや。

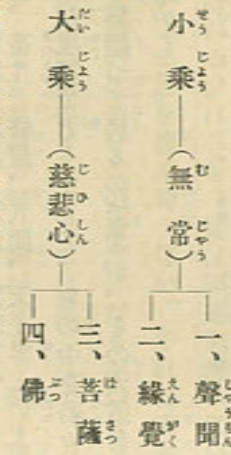
ところが「我大師」吾々の師であるところの佛様は「變易猶わたり給へり。況んや分段の生死をや」この生死といふのはさつき申すやうに人生の變化であります、その變化が二つあるといふのです。普通

でも始終困つて居る奴がある。或はこつちの方には狡猾い事をやつて居つてもかなり樂にして居る者がある。斯う思ふと馬鹿々々しくて仕様がなない。けれどもそれはこの世だけの生命ではない。遠い昔からこの世を一貫して、後の世まで繋がる生命だと解りますと、この世の事をこの世だけで總勘定をしないで宜しい譯です。だから今善い事をすれば、今報いが来なくても後で善い報いが来るだらう。今間違つた事をすれば、今災難が来なくても後で災難に罹るだらうといふやうに、所謂三世、過去と現在と未來とを一貫した事が解りました、初めて本當の因果、原因結果といふものを深く信することが出来て來る。さういふ意味で因果を知らないと云つて居るのです。因果を辨へざる事嬰兒の如きものである。

だからさういふ佛教以外の教を頼りにして、それを船として生死の大海——生死は前に申した人生の變化です。いろ／＼變化極りないところの人生を渡

の迷つて居る人の變化はそれは「分段の生死」だといふ、それは迷つて居る人間は境遇が始終變る、その變るのが段が違つて居る。嬉しい事があると大層工合が良いし、苦しい事があるとなんだか地面に叩きつけられたやうな氣がする。少し落着いた時には人情もあるけれども、忙しい時にはムラ／＼とするといふやうに、始終上つたり下つたりして居る。甚だ皆さんを中に入れて失禮ですけれども、お互がさうでせう。朝起きるから夜寝るまで同じ價值である者は居はしない。或る時は大層穩かになり、或る時はムラ／＼とする。電車に乗つても、日中の人の少い時には「お爺さんお先へ：お婆さんお先へ：」と言つて自分が後から乗るが、暮れ方のラッシュ・アワーの時には「この婆、邪魔だ」と言つて突き飛ばして乗る。自分の價値がチツトモきまつて居ない。境遇次第でかなり善くもなれば又悪くもなる、かと思ふと又思ひついて幾らか善くなる。だから分段の

生死で、いろ／＼段がある。善くなつたり悪くなつたり、上つたり下つたりしていろ／＼變化の中を通つて行きます。ですから凡夫の生活といふものは分段の生死である。そこが無くなれば結構です。それから佛の道を學んで後には、今度は「變易の生死」といふことになる。變易の生死といふのはだんだん變つて行くが、上つたり下つたりするのではない。だん／＼善くなる方の變化を謂ふのであります。



一番初めは佛の「小乘」の教といふものを學んで、低い方の教を學んで行きますと、世の中に執はれない心持が出来て来る。所謂世の中の「無常」を感じ

世の中は無常だから餘り懇張たり争つたりすまい、斯う思ひ定める。これが聲聞です。

それから教を聞いただけでなく、自分が又自分で工夫して、毎日見たり聞いたりした所と思ひ合せて世の中の無常を感じるといふことになればそれは「緣覺」です。緣に依つて覺る。緣といふのは毎日自分が出會ふ出来事と思ひ合せて、さうして世の中に執はれない心持をつくつて行きます。それで聲聞と緣覺、この二つを一緒にして「二乗」と言ふ。

そこで世の中に執はれない心持が出来ますと、今度は世の中の人の爲に力を盡すのが愉快になつて来る。自分が執はれて欲しい／＼と思つたのでは、人の爲に力を盡す餘裕はありはしない。自分が無暗に欲しいといふ考が無くなつたら、人の爲に親切をしてやつて、人の爲に力を貸してやれば、「ア、快い心持だ」といふことになつて來ます。それだから無常を感じた後に今度は佛の「大乘」の教といふもの

ます。佛の小乗の教といふものは佛の初めにお説きになつた教であります。これは世の中の無常を教へる。「お前達は金が欲しいの、位が欲しいの、地位が欲しいのと言ふけれども、さういふものは無常だ、いつ迄同じで居るものではない。綺麗な花が咲いたと思へば散つてしまふぢやないか、月が盈ちたと思へば虧けて行くぢやないか、大きい家に住んで居ると思へば地震があればひつくり返へるぢやないか、顔が綺麗だと思へばちき皺だらけになるぢやないか、一つも常住のものはありはしない」と言つて世の中の無常を教へられる。さうすると「成程さうだ、どうもいろ／＼世の中は變化が多いのだから、その變化の多い世の中に、無暗に慾を張つて、あれが欲しい、これが欲しいと言ふことはやめよう」といふ氣分になるのです。さうなつて世の中の無常を伺つて成程と思ひ詰めたのが所謂「聲聞」です。聲に聞くといふのは、教を聞いてその教を納得して、

を學びますから、所謂「慈悲心」が出来て來る譯です。だから小乗の教といふものも順序としては宜しい。あまり世の中に對する慾望ばかり有つて居る者は、到底慈悲の行ひなどの出来よう譯はないから、先づ世の中に執はれない心持が出来て、それから慈悲の行ひをすると斯うなる。その慈悲の行ひが十分に出来れば「菩薩」であります。この聲聞、緣覺、菩薩といふ三つの處を通つて行つてだん／＼進歩して行く。それを「變易の生死」と言ふ。變易といふのは變つて行く、違つて行くことだけれども、たゞ出鱈目に違ふのではない。進歩して行く。最初の教を聞いて世の中の無常を感じるよりも、自分で日々經驗する事に思ひ合せる方がモウ少し上である。それよりモウ慈悲の心持を有つて一切の人を救はうといふことになれば、尙更上ですから、だんだんと進歩して行きます。さうして結局は一番終ひは「佛」に成る譯ですが、佛に成つてしまへばモウ

變化はない。佛に成るまでは變つて行く。その變るのが、世の中の凡夫の變り方は、さつき申すやうに善くなつたり悪くなつたり、上つたり下つたりして居るけれども、修行して行けばだん／＼善くなつてだん／＼進歩して行く。だからこれを變易の生死と言ふ。

佛様はやはりさういふ風の順序を通つて、さうして「變易猶わたり給へり」變易の生死といふ世の中の無常を感ずるといふ所から、慈悲心を起して、その慈悲が徹底して佛に成るといふ所まで通つて行らつしやつたのだ。さういふやうな順序でありますから「況んや分段の生死をや」世間の俗人の有つて居る變化ナンといふものは無論のこと通り過ぎてしまつて、モウ再び斯ういふ凡夫の境界に戻つて來る筈がない。

「元品の無明の根本猶かたづけ給へり」元品の無明はさつき申すやうに自分といふものを捨てる。そ

れが一番根本であるが、それがどうも出來ない。だから元品の無明といふ、人間として自分を捨て難いといふその根本の迷ひさへもお捨てになつた。況んや見思即ち見惑、思惑のやうな細かい、いろ／＼厄介な迷ひナンといふものは、モウ佛様であれば無論捨て、居らつしやる。

此佛陀は三十成道より八十御入滅にいたるまで、五十餘年が間一代の聖教を説給へり。一字一句皆眞言なり、一文一偈妄語にあらず。外典・外道の中の聖賢の言すら、いふことあやまりなし。事と心と相符へり。況んや佛陀は無量曠劫よりの不妄語の人、されば一代五十餘年の説教は、外典・外道に對すれば大乘なり、大人の實語なるべし。初

成道の始より泥洹の夕にいたるまで、説ところの所説皆眞實なり。

その佛様が三十歳で御覺りになつてから八十歳で御入滅になるまで、五十年の間の一代の教といふものは、これはモウ皆尊いもので「二字一句皆眞言なり」皆眞實の言葉である。佛のお心持から出た言葉である「一文一偈妄語にあらず」偈一つでも文句一つでも間違ひといふものはありはしない。「外典・外道」孔子の教とか老子の教とか或は婆羅門の教といふ中でも、聖賢れた人の言つた言葉であれば、大した間違ひはない。皆人の手本となるべき言葉である。「事と心と相符へり」日々爲せる行ひと心とに表や裏が無い、一致して居る。況んや佛様は無量曠劫より以來の不妄語の人、ズツと昔から人を欺くとか、心と行が違ふといふやうな事のない方である、それだからお釋迦様の一代五十年の間の説教といふものは、

外典外道、支那の孔子や老子の教とか、或は印度の婆羅門の教といふやうなものに比べれば、大乘である、佛の勝れた教である。「大人の實語」本當に勝れた人の眞實の御言葉である。「初成道の始」佛陀伽耶といふ處で御修行になつてお覺りになつたその時から「泥洹」といふのは入滅のことで、入滅の時まで説くところの教といふものは皆眞實である。

これで佛教といふものと、佛教以外の教とを比べてまして、それは佛教の方が非常に深いものだといふことを一應明かにしたのであります。併ながらその佛教の中で更に細かに分けると、又浅い教もあれば深い教もあるといふことをこれから言ふのであります。

但し佛教に入て、五十餘年の經々八萬法藏を勤たるに、小乘あり大乘あり。權經あり實經あり。顯教、密教。頓語、

麤語。實語、妄語。正見、邪見等の種々の差別あり。但法華經計教主釋尊の正言なり、三世十方の諸佛の眞言なり。大覺世尊は四十餘年の年限を指て、其内の洵沙の諸經を未顯眞實、八年の法華經は要當說眞實と定給しかば、多寶佛大地より出現して、皆是眞實と證明す。分身の諸佛來集して長舌を梵天に付く。此言赫々たり、明々たり。晴天の日よりもあきららかに、夜中の満月のことし。仰で信ぜよ、伏て懷べし。

そこでその佛教といふものは最も勝れたものだと、全體を纏めて言へばそれで宜しいのであるが、その佛教といふものも釋尊の一代五十年も説いて居らつ

しやるから、その五十年の間には、聞く人の機根に依つて、或る時は浅い事を説かれ、或る時は深い事を説かれる。澤山のお経がある。さうして八萬法藏といふのは澤山といふ意味でありますが、澤山の教が遣つて居る。その遣つて居る教を比べて考へて見ると、その中に小乗も大乘もある。小乗といふのはさつき申すやうに、世の中の無常を教へて、さうして世の中に執はれない心持を有たせる教が小乗である。大乘の方は大悲の心持を有つて、人の爲、世の爲に力を盡すことに喜びを感じさせようといふやうな趣意で説いて居られる。であるから大體分けて見れば小乗といふものと大乘といふものがある。それから「權經あり實經あり」權といふのは方便の教實は眞實の教といふことであります。

權——(方便)——隨他意
實——(眞實)——隨自意
方便の教といふのは別の言葉で言へば「隨他意」と

言つて、聞く人の心持を斟酌して説かれる。他の心持に隨ふ。向ふが智慧が無い者なら、極く易しい所から説いて行く。向ふが相當に知つて居ればかなり高い所から説くといふのでありますから、隨他意である。聞く人の心持を斟酌して説く。それから眞實の教といふのは、佛様が御自分でお覺りになつた事をその儘打明けて説かれるから、「隨自意」と言つて佛自らの心持に隨つて説かれるのであります。

ところでこの場合チヨット斷つて置きたいのは、方便の教といふものは眞實の教に續くものだといふことを忘れてはならない。方便は嘘ではない。眞實の教に入る順序として方便の教を説かれるのですから方便の教と眞實の教といふものは續きである。それだから方便といふものは非常に尊いのです。相手の力を量つてだん／＼深入りして説いて行くのであります。世間ではどうも出鱈目を言つて「嘘も方便だ」などと言ふけれども、嘘と方便とは違ふ譯です。嘘

はどこまで行つても嘘であります。方便は嘘ではない、眞實の方と續くのであります。洵につまらぬ譬のやうでありますけれども、譬へば大阪なら大阪まで汽車に乗つて行くとする。東京から汽車に乗つて品川を通つたり、横濱を通つたり、静岡を通つたりして、大阪へ行く。その静岡を通るとか横濱を通るといふことが方便です。これは大阪と續きます。決して違つた所に向つては居ない。それを大阪へ行くかと思つて上野から汽車に乗つたのでは、それは方便ではない、それは出鱈目である。だから佛の方便の教といふものは出鱈目ではないのであつて、眞實の教に續いて居るものである。一步々々その方便の教を辿つて行けば、眞實の教まで到達が出来るのだといふことを忘れてはならない。

それだから法華經の中にその事を言つてあります。どんな浅い教を説く時でも、眞實の教を説いてやらうといふ心懸けで説いて居るのだと言はれるの

です。これはつまらない奴だからいゝ加減にして放つて置かうとは思はない。今は程度が低いから假に低い教を説いて居るけれども、だん／＼に教へ導いて、結局は自分の本當に信じて居る所を教へてやりたい、この心持で説いて居るのだ。斯ういふ譯で法華經の中には「聲聞の弟子無し」と言つてある。聲聞といふのは今言ふやうに世の中の無常を感ずる者でありませんが、それだけで止めて置かない、それでは自分の弟子とした甲斐はない。初めは世の中の無常を感ずるくらゐの程度で教へる。けれどもそれが解れば「モツと深い事を……モツト深い事を……」と教へて、聲聞ぐらゐの所で捨て、置きはしないぞといふことを法華經の中に言つてあります。ですから方便といふことをつまらないものだと思つてはいけなないのであります、それは眞實の教の續きのものであります。さういふ譯で「權經あり眞經あり」方便の教を説いて居るやうなものもあれば、眞實の

お釋迦様の信じて居らつしやる事をその儘打明けられたお經もある。

それから「顯教密教」これは眞言宗の方では、自分の方を密教と言ひ、他の方を顯教と申すのであります。斯ういふ場合には眞言と他と比べなくても宜しいので、極く浅い一通りの教と、それから密と言つて極く深い非常に深入りした教と兩方ある。斯ういふ風に取つて宜しい譯です。

それから「輕語麤語」輕といふのは細かい事で、精密な教、麤は極く大ざつばな教といふことであります。これも初めはそんなに細かい事を説いても相手に解りませぬから、極く大ざつばな大體の事を話して、それからだん／＼解つて來れば、非常に精密な細かい奥の奥まで入るやうな事を説かれるのであります。だから極く細かい事を言つて居る場合もあれば、大ざつばな事を言つて居らつしやる場合もある。

或は「實語妄語」本當の佛様の思召をその儘語られる場合もあれば、妄語といふのは少し言ひ方が妙ですが、眞實を打明けないといふくらゐの意味です。佛様が妄語をつく譯はないのでありますけれども、マア、初めは相手の力が足らなければ、御自分の考をその儘打明けないで極く浅い所を説いて居らつしやることもある。

或は「正見邪見」佛様が御自分で斯うだと見究めたお考をお説きになることもあれば、邪見といふのは、これも間違つた事を言はれる譯はないが、自分の正しく見究めた所まで行かない、モツと口元の方のザツとした教を説かれることもある。

斯ういふ風に全體から言へば佛教が尊いけれどもその佛教の中をいろ／＼分ければ、浅いのもあれば深いのもあれば、佛の心持をその儘打明けられたのもあれば、或は聞く人の力相當に説いたのもあり、いろ／＼ある。たゞその中に於て法華經ばかりは教

主釋尊の正言なり。お釋迦様が本當に自分の信じて居らつしやる所を説かれたものである。

又お釋迦様お一人のお考ではない、「三世十方の諸佛の眞言なり」これは法華經の法師品の中に、總ての佛の教は結局同じ事だといふことがハッキリ言つてあります。それは佛様に依つて説き方は違ふでせう。場合が違ひ、處が違ひ、又教を聞く相手も違ひますれば、教の説き方は違ふでありませうけれどもその教の歸着する所は、どれ程大勢の佛様が出られても同じことであります。絶対の眞實の事が二いろいろあつては眞實の事になりはしませぬから、無論一つであります。だからお釋迦様お一人を吾々が信じて、お釋迦様に歸依するといふことは、過去現在未來の總ての佛に歸依すると同じである。又十方の世界の有ゆる佛に歸依すると同じである。斯ういふ事を教へられて居る。さうでなければ吾々が魂を打込んで信するといふ譯には行かない。また「他に別のもの

「がありはしないか」ナンと思つた日には本當に信ずることは出来るものではありませぬ。それは信仰を決定する上に於ては極めて大切な問題でありますから、法華經の中にはその事は繰返し／＼言つてある。お釋迦様が仰しやる事が本當なんだ。どんな佛が出て來てもこれより以上の事は言はれないし、又どの佛の言つた事でも、結局お釋迦様の仰しやつた事と一致するのだといふことを繰返して教へてあるのであります。

どうも今の時代は世の中が變つて行く時代でありますから、信仰の上にも於てもさういふ懸念を起し易い時代である。世の中は變つて行きます。吾々が子供の時には行燈を點けて居つたのがランプになり、瓦斯燈になり、電氣燈になつた。尻からげして歩いたのが駕籠に乗るやうになり、人力車に乗るやうになり、今日は汽車に乗り、自動車に乗り、又飛行機に乗るといふやうに變るものでありますから、さう

ります。
それで大覺世尊、即ちお釋迦様は、四十餘年の年限を指して、その内の恒河の沙の數ほどの澤山のお經を『未顯眞實』と仰しやつた。これは無量義經の中に、

四十餘年には未だ眞實を顯さず。

とあります。無量義經といふのは法華經を説かれる前に、同じ靈鷲山に於て説かれたお經であります。その無量義經の中に「四十餘年には未だ眞實を顯さず」今まで四十餘年の間説いたが、まだ／＼自分の思ふ事をスツカリ打明けはしなかつた。斯う言はれて居る。それから次に法華經を説いて居られるのでありますから、その事を茲に言ふので「四十餘年」といふ字を補つて見れば能く解る。四十餘年未顯眞實と仰しやつた。それから八年の間靈鷲山で説いた法華經は「要らず當に眞實を説くべし」とあつて、佛といふものは世の中に出て久しく教を説いて居る

いふものばかり見て居ると、教でも「又暫く經つたらモツと良いものが出て來はしないか」と思ふ。「ナニニ佛教と言つても、これはモウ三千年の昔に説いたのだから、これから百年か二百年経つたら佛教よりモツと良いものが出て來はしないか」といふやうなことを若い人などは時々言ふのでありますけれども、人間の心の問題を徹底的に考へる時に於て、生活状態が變つたからと言つて、二いろも三いろも考へ變るべきものではない。人間の本性を説いた教といふものは千萬年経つても變るものでない。そこをしっかりと捉まへて行かなければ信仰といふものにはならない。それだからこの三世十方の佛の教だといふことは非常に大事な事でありませぬ。吾々はお釋迦様を信じさへすれば宜しい。さうしたらその釋迦様のお言葉に依つて吾々に傳へられて居る言葉は、千萬年経たうとも更に動くものではない。三世十方の諸佛の本當のお言葉であるといふことになるのであ

時には、必ず結局は自分の信じて居る眞實の事を打明けて説くものだ。斯う仰しやつてある。これは法華經の中にハツキリさう言つてある。斯ういふ譯だから、法華經の中に説かれて居る事といふものはいつ迄經つても變るものではない。説いて居る佛様御自身が眞實を打明けて説くぞと名乗つて居らつしやるのだから、これは變つて行くものではない。

ところがさう仰しやつた時に、まだ／＼それでも人が疑ふ虞があるから、多寶如來といふ佛様が大地の中から出て來て、釋迦牟尼佛の仰しやつた事は「皆是れ眞實だ」と斯う證明をされた。これはチョット考へると要らない事のやうです。お釋迦様が絶對の事を説いて、これが眞實だと仰しやつたら、別に證人などを立てないでも宜さうなものです。ところがお釋迦様がお説きになつた事を、多寶如來がこゝに出て來て證明をするといふことは、どういふことかと言へば、それは理と智を表はすのだと言は

れて居ります。

多寶如來 理

釋迦如來 智

教を説くといふ方は「智」のはたらきである。人を救ふといふはたらき、人を教へるといふはたらきが智慧のはたらきである。だから釋迦様が説法をされるといふのは、それは佛の有つて居らつしやる智慧の現れである。智慧は即ち慈悲のはたらきの本でありますから、お釋迦様は智であります。そこで佛様の智慧を以て説かれた教は間違ひがないといふことは、これは「理」に照して考へる。だから多寶佛が出て来て、釋迦如來の言つた事は眞實だと仰しやつたといふことは、お釋迦様の智慧の説法は、理に照して千萬年に亘つて變らない、絶對の理の上から考へて間違ひない。斯ういふのであります。それだから一つのもの、兩方面ではありますけれども、お釋迦様が説かれたといふだけでなしに、又この證

明といふものが出来て来る。吾々はさう信ずる。お釋迦様のおはたらきといふものは、實に廣大無邊なものであるから、その廣大無邊なはたらきは、結局絶對の眞實の理が現れてその説法となつたのだ。斯う思ひます。そこで釋迦多寶といふものを二つ並べて考へるのであります。それで「皆是眞實」で、お釋迦様の仰しやつた事は、絶對の理の上から考へても間違ひない、千年経たうが萬年経たうが、眞實の事は眞實の事だから、これが嘘になる筈はないのであります。そこで多寶如來がこれを説明された。それから分身の諸佛といふのは、お釋迦様の十方の世界に身を分けられた佛様、これが又其處に集つて、さうしてお釋迦様の仰しやる事は間違ひないといふ説明に立ちます。さうして「長舌を梵天に付く」これは法華經の神力品にある話であつて、佛様が舌をお出しになつたらその舌が天まで届いたといふことがある。舌を出すといふことは、印度では本當だ

といふ證據です。日本では人の前で舌を出したりすれば、人を馬鹿にしたやうなことになるますけれども、それは風俗が違ふから已むを得ないので、印度では私の言ふ事は間違ひありませんといふ時に、舌を出す。その舌が天まで届いたといふことは、絶對に本當だといふ意味を表はして居る。神力品にその事が説かれて居りました、お釋迦様の仰しやる事はモウ絶對の眞理だ、間違ひない。斯ういふ事になつて居るのでありますから、「此言赫々たり、明々たり。晴天の日よりもあきらかに、夜中の満月のごとし」モウこれが間違ふ譯がない、ちようど空の日のやうな、又夜の満月の如きものであるから、「仰で信ぜよ、伏て懐べし」モウどう考へても、何處から見ても間違ひないことだといふので、これを本當に信じたら宜からうと言はれるのであります。

以上で先づ法華經が眞實の教だといふことを一通り申しまして、それから今度は法華經の中に説かれ

ました意味を、支那の天台大師が「一念三千」といふ言葉で以て言ひ表はして居られるといふ話に入るのであります。この一念三千といふことは、前に法華經のお話を申す時に一通り済ませたことでありますが、この場合極くザツと申して置きたいと思ひます。

それには先づ十界といふことを立てるのであります。十界といふのは人間の心の中の世界でありまして、人間の物を考へるその考へ方です。人間の考といふものは、何百通り、何千通り、何萬通りもあるでありますが、これを大體分けますと、十の世界が吾々の心の中に開かれて居ると言はれる。その中で

- 地獄界……(瞋恚)
- 餓鬼界……(貪欲)
- 畜生界……(愚痴)
- 修羅界……(諂曲)

一六 凡

人界……(平正)
天上界……(歡喜)

これだけが先づ一かたまりになるのであります。地面の下に地獄があるとか、天上界といふのは雲の上だといふやうなことは婆羅門時代から言つて居りますけれども、それは方便としてさういふ事を言ふので、大乘の至極の所に行けば、斯ういふ世界は皆自分の胸の中に開ける。今私が斯うやつて居るこの心の中に、地獄もあれば餓鬼もあれば畜生界もあればいろいろなものが入り混つてあるのだといふことを言ふのであります。

そこで地獄界といふものはどうして起るかと言へば、これは瞋恚の心が自分の胸の中を占領してしまつて、瞋恚より以外に何もこの胸の中に入る餘裕がなくなつた時、その時に吾々の心の中に地獄界が出現して居るのだと言はれる。人間にいろいろ迷ひがあります、その迷ひの中の一根本の、一番始末

の悪い迷ひといふものは瞋恚です。何故瞋恚がそんなに悪いかといふと、瞋恚といふものは人を孤立せしめる。腹を立てた時は一人ものになる。貪るこいふのも随分悪いけれども、貪る時は仲間を拵へることがある。「どうだい一緒に儲けようぢやないか」といふやうな譯で、貪る方はまだ「始末が宜い。ところが腹を立てた時には『一緒に怒らうぢやないか』といふことはない。怒る時はスツカリ一人ものになつてしまふ。一體人間ばかりではない、有ゆるものは皆共に生きなければならぬものである、物が存在するといふことは共に存在するといふことである。天地の間に何物だつて孤立して居るものといふものはありはしない。その共に生きる根本をまるで打破つて、人間が孤立するといふことは一番恐ろしいことである。それだから瞋恚といふものを一番いけないと言ふのであります。腹の立つた時には孤立してしまふ。親でも女房でも子供でも、カン／＼に

なつた時には皆氣に入らぬ。人間だけではない、茶碗でも土瓶でも皆氣に入らぬで抛り出すといふやうなことになる。總てのものを敵にしてしまふからこゝれは恐ろしいことである。皆お互がさうなつた日は人生といふものは根本から破壊されてしまふ。それから又この破壊性といふものは一度起りますと續いて起る。物を壊すといふのは一つでは済まない。一つ壊すと又モウ一つ壊す。破壊性といふものは必ず第二の破壊を生み出し、第三の破壊を生んで来る。そこで瞋恚が一番恐ろしいと言はれる。

その瞋恚といふものは何から起るか、これは自分と違ふ者に對して不愉快を感じる所から起る。自分が右と言ふ時に人が左と言へば不愉快です。それが瞋恚の本です。だから人と往來でぶつかつて腹を立てるといふのはそれである。自分はこつちから行く人は向ふから来る。それでぶつかる。皆がこつちから行つて居ればぶつかる心配はない。自分と違ふ者

に對して不愉快を感じる。それが極度まで行つたものが瞋恚です。その瞋恚が心の中を占領してしまつて、他の考がまるで無くなつたといふ時は、所謂地獄界がそこに實現されるといふ譯であります。

それから餓鬼界といふのは貪欲と言つて、貪るといふ心持が自分の胸の中を支配してしまつて、他のものが少しも入らなくなる、その時に餓鬼の世界がそこに出現されて居ると言はれるのであります。貪るといふのはどういふ所から起るか、欲しいといふのは、金が欲しいとか、地位が欲しいとか、身分が欲しいとかいふことになる。けれどもそれよりモツと恐ろしいのは、人の親切を獨占したいといふことです。人が親切にして呉れると『モツと親切にして貰ひたい』さういふのが貪欲です。金が欲しいといふのはまだ罪が軽い、人間を獨占してしまひたくなる。それがいけない。だから秘密といふものが世の中にあるのはそれです。人間を獨占したい。「こ

これは君だけに話す、秘密だヨ」と言はれると快い氣持になる。ナニ人の秘密などを聴いても、仕様がなけれども、自分だけと言はれると大變快い氣持になる。「これは君、人に話しては困るヨ、君だけだヨ」ナンと言ふ。その聴いた人が、又他の人に「これは君だけだヨ」と言つてだん／＼話してしまふから、結局秘密でなくなるのでありますけれど、なんだか秘密といふものは快い氣持です。これは皆貪欲から起る。自分だけ知つて居たい、自分だけ親切にして貰ひたい、自分だけ懇意にして貰ひたい。皆貪欲であります。

その貪欲といふものはどういふ迷ひから起るかといへば、やはり中のものが皆自分の爲にあるのだと思ふ。それから貪欲といふものは起きて来る、皆自分の爲にあるのだと思つて居る。だから電車に乗る時には自分一人の電車だと思ふ。中に入つて腰が掛けられないと腹を立て、しまふ。そのくせ片道七錢

ぐらゐしか拂つては居ないのに、自分一人の電車だといふやうな氣がする。何でもかんでも獨占したいお天氣まで獨占したい。傘を持つて居ない時には、「降らなければいゝナ、降るなら明日の晩降つて呉れ、ばい、ナ」と思ふ。私は今日傘を持つて来たから、實は「少々降ればいゝナ」と思つて居る。註文通り今雨が降つて来たやうであります。天氣まで自分の勝手にした。傘を持つて出た者はチツトは使ひたくなる。持つて居ないと「どうか家へ歸るまで降らないやうに……」と思ふ。雨の方ではいつ降つたらいゝか判らない。こんな勝手な事をやつて居る。何でも自分を主にして、自分の爲に總てのものが存在して居るかの如くに考へます。それが貪欲であります。それが心の中をスツカリ占領した時に餓鬼界といふものが現れる。餓鬼は足りない足らないといふ心持、何でも足らないといふことになる。そこで貪るといふ心持が起れば無論惜しむといふ

心持が起る。だから貪と惜は必ず伴ふ。これが又恐ろしい。自分が欲しい、だから一度掴まへたものはモウ放さない、斯うなる。政治の争ひなどはさうです。どうしても政權が握りたいと思ふから、一度喰ひついたらな／＼放さない、やはり貪と惜です。今の電車の場合でもさうです。腰が掛けられないと早く掛けたいと思ふ。一度腰を掛けたらモウ立つのが嫌やになる。だからお婆さんがヒョロ／＼して居つて氣の毒だと思ふけれども、折角腰を掛けたのだから立つのが嫌だ。斯ういふ時に限つて新聞を持上げて成べくお婆さんを見ないやうにする。新聞の一つ所をいつまでも見詰めて居る人がある。さういふのは立ちたくないからでせう。どうも人間といふものはさういふ弱味がある。

それから畜生界といふものはどうして出来るかといふと、これは愚痴から起る。愚痴といふのは目前ばかり見る。目の前の事ばかり見るのを愚痴と言

ふ。さつき言ふやうに因果の關係といふものは總てを一貫する筈のものであるのに、これをツイ忘れてしまつて、目の前の所だけ見て居ると、喜んだり、笑つたり、怒つたりして前後左右の分別が足らない。それが所謂愚痴であります。こんな事を言ひながら私などもどうも愚痴で困るのですが、今年の冬の大雪の時に、神田の方まで行つて學校から自動車を頼んで貰つて家へ歸つて来ました。大變な雪で途中で車が停るかと思つた。それでツイ運轉手に向つて「どうだい、雪は、チツトは小熄みになつたカイ」と聞く。運轉手は「イヤまだ／＼です」と言つて居る。又五六町行くと、「どうだい、チツトは小熄みになつたカイ」と聞く。後で考へて自分ながら馬鹿々々しいと思つた。運轉手が雪を降らして居る譯ではない、聴いてもはじまらないのですけれども、ツイ／＼聴くやうになる。愚なことです。能く考へて見れば、ナニモ運轉手に聴いたからといつて雪が

熄む譯ではない。電車が停電すると「いつまで待たせるのだ」と言つて車掌に喰つて掛る人がある。車掌が電氣を停めて居るのでも何でもないけれども、それがやはり愚痴です。目の前の事に執はれて前後の分別が足らなくなる。人生の事皆それが多い。それで思慮分別の足らない状態を畜生界と言ふのでありませぬ。

それから修羅界、これは諂曲の心持から起る。諂曲といふのは一言で言へばこじつけるといふことです。自分の都合の好いやうに理窟を枉げてこじつける。それが諂曲です。皆それをやる、いろ／＼な事に就て、責任は成べく人に押付けでしまひ、うまい事は自分の方に都合の好いやうにやらうといふので理窟をこじつけまして、正しい道理を枉げて己れの都合の好いやうに解釋する。それが諂曲です。お互がそれをやるから修羅の争ひと言つて争ひになる、両方がさういふ事をやつて居る。右の方の人は右の

は滅多にありはしませぬけれども、どうかすると稀にはある。銀座通りで勸業債券を拾つたやうな時には、夢中になつて何處を歩いたか判らないで家へ歸つたりする。さういふやうに何かヒョツとした事で夢中になることがある。さういふ時にはまるで雲の上かなにか歩いて居るやうな氣になる。それが天上界です。けれども永く續かない、又元の地獄に墮ちてしまふけれども、さういふやうな事もある。

これを「六道」と言つて、その六道に輪廻する。車の輪が廻るやうに、この六つの世界を吾々は始終歩いて居る。或る時は腹を立て、見たり、或る時は嬉しくなつて見たり、或る時は落着いて見たり。時嬉しくなつたり、嬉しくなつたかと思ふと又直きに悲しくなつたり、六道をグル／＼歩いて居る。若し一日の自分の生活を考へて見るならば、一日の内、六道の輪廻がある。一月を考へるならば一月の内、六道の輪廻がある。始終自分の心といふものは動

七〇
方に都合の好い事ばかり考へて居る。左の方の人は左に都合が好いやうにこじつける。両方がこじつけをすれば争ひといふものが起る。それが所謂修羅の争ひであります。

それから人界といふのは普通の人間であります。普通の人間は腹も立つけれども、地獄ほどにならないで又思ひ返すことが出来る。慾張るけれども、餓鬼ほどにならないでチツトは思ひ返す。時々思ひ返す。それが人間で所謂「平正」といふ心持であります。始終正しいのではないけれども、時々思ひ返す。吾々でも地獄や餓鬼の邊まで行くかも知れぬけれども、まさかそれつきりではない。時々又思ひ直して行く。時々怨めしくなるけれども亦時々思ひ直す。斯ういふのが人界であります。

それから天上界といふのはこれは歡喜といつて喜びの心持です。喜びが心を占領してしまつて他の事を何も考へないといふやうな氣分になる。そんな事

いて居る。これを六道に輪廻すると申します。斯ういふ心持が替る／＼心に起つて、さうして自分の世界といふものを自分で作つて居ります。

この六道に輪廻するのが所謂凡夫の生活でありまして、その凡夫の生活を何とかして救つてやりたい、六道輪廻の外に出るやうにしてやりたいといふことがお釈迦様の所謂大慈悲である。どうかさういふ凡夫の生活を離れるやうにしてやりたいといふので世の中に出て教を説かれたと言はれて居るのであります。その教の根本をしつかり捉まへないで、ただ徒に多く經典を讀んでいろ／＼な文句を覺えても自分でその佛の大慈悲に感激する事なくして、自分の心を土臺から直すことをしなければ、千萬卷の本を讀んでも六道の輪廻を通れることは出来ない。口惜しい、忌々しいで一生涯は滅茶々々になる。本を多く讀んで覺れるものではない、佛の慈悲に感激するといふことがなければ駄目です。「吾々凡夫の六

道に輪廻する者を心から可哀さうだと思ふから教を説いて下さつたのだ、有難いな。この有難い教を何とかして守らうではないか」この心持がなければ、たゞ讀んでも駄目であります。自分でお經などを讀んで毎日信心して居ると言ふ人が、實は六道の輪廻をやつて居る人が多い。それは餘程考へなければならぬ事でありませう。

そこでこれが六つありますから「六凡」と申し

記事

本部 團報

本多上人第七忌相談會 三月には本多上人の記念會を誓ふたいものでないかと、誰れが言ひ出すともなく同志の方々が、舊冬本部の會議室で相談會があつた。一番乗は佐藤中將で次で市原求氏、時崎博士や井上中將、それから下村前宗教局長、小林先生や山田博士等續々と參集されて事業計畫の御相談があつた。其の詳細は近日發表

釋尊御成道會 十二月六日の日曜日午後一時三十分より、本講堂に於て小西日喜齋導師となつて護法要を誓ひ、引續いて「降魔と成道」と題して小林先生、並に「祭の意義」小西師に依つて講述され四時閉會。

開目鈔講座 小林先生の御遺文講義、開目鈔は上巻の八分通りを講義されつゝあるが、正月の初講は十三日より、始まりは六時三十分動行、七時から開講さるゝ豫定、奮つて來聽を切望する。

日曜日講集 舊年は毎日曜日午後二時より四時迄まで、本部に於て各方面より妙化導を興へられて來たが、正月は六日より寧ろ三十日例年の通り毎朝六時四十分より修行會の誓ひがあるから、之に合體して諸氏の參加を望む次第である。

幹部會 押し詰つた十二月十四日午後五時から本部に於て、今年最後の役員會が開かれ、最近の内外に亘る教報やら、明春の要項が協議され七時三十分散會した。

横濱教誌

例月の通り、小西、和賀、磯部諸先生を中心にして、各家庭に清淨な信仰の聚りが続けた。
十一月中旬に同信石毛女史は不慮の災禍を蒙り一ヶ月ばかり横濱病院に入院されたが、幸に發熱も苦痛もなく、目下自宅に静養され

七二
ます。その他に四つの世界がありまして、合せて所謂十界といふものなる譯であります。その四つといふのは、前に申しました聲聞と緣覺と菩薩と佛です。これを合せて十界といふことになる譯であります。

それから其の十界といふ十の世界に、各々また他の世界を具有して居るといふので、十界互具といふ話に入るのであります。(第四講了)

することに於て居る。

教化強調週聞 去る十一月十日前後に於て、教化聯合會に加盟の團體では進んでこの教化運動を勵行することになつて居るので、本團に於ても幸に先頃南洋を一巡された日生上人御令息禮三氏を中心に梅島少佐も來授され、磯部理事等と共に一大師子吼をされた。

全國教化團體代表大會 十一月廿五及六の兩日に亘つて、中央教化聯合會主催の下に神田一橋教育會館に開催され、全國より參加人員五百名、本部よりは磯部理事出席。議事の内容は、十二月號の「教」誌上に報道されたから此所には省略する。

て居る、近日御全快の歡を見るであらう。

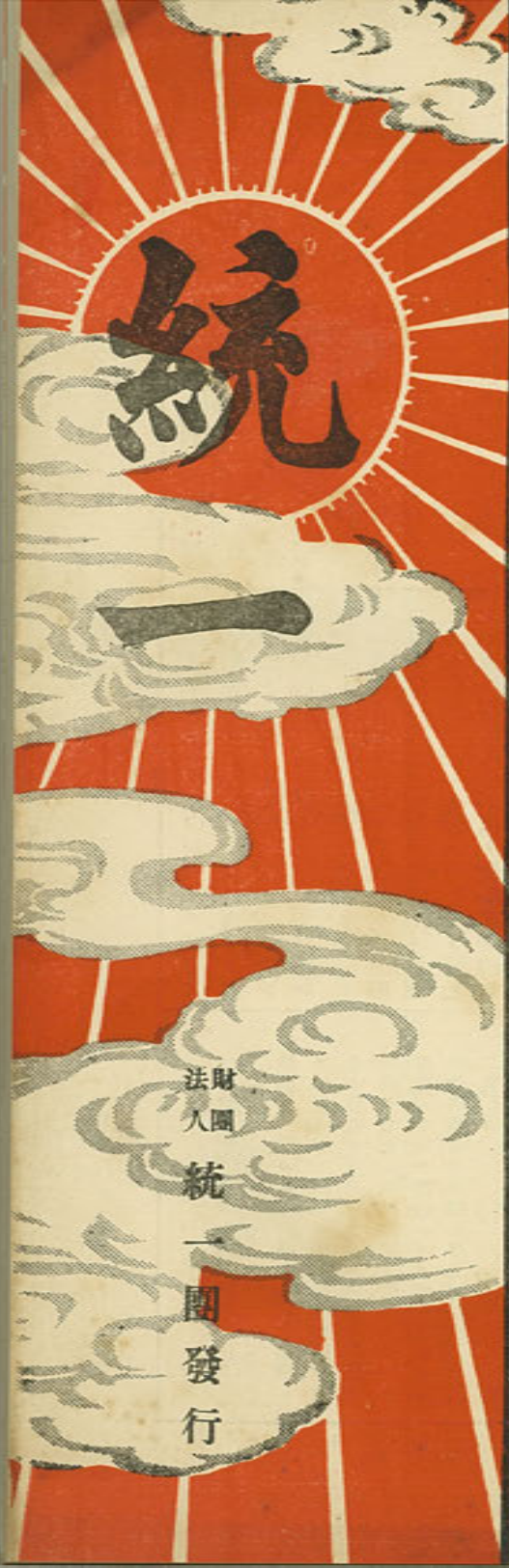
岩上家若主人金三郎氏は、社命に依つて一月三日此帆の箱崎丸で渡佛、三ヶ年御留學になる由。前途を祝福して俱に喜び、其大任を全ふされんことを願する。

福島支部報

十二月五日(土)午後三時半より高南日蓮聖人讚仰會に於て、本年歳末の例會を催し、磯部先生の壽量品講話を拜聴し、夜分は七時より大町中村家に有志座談會を開き、釋尊御成道會の法話を伺ひ、十一時半先生の御歸京をお見送りして散會した。

二本松教信

- 十一月十五日 社會事業二本松佛教不契會例會托鉢修行。
- 同 廿日 午後一時五十七分戰死者遺骨通過にて出迎讀經す。
- 同 廿一日 午前二時三十分同上
- 同 廿三日 午後一時より山形縣下梨郷小學校にて講演す。
- 同 廿四日 午後六時より山形縣下寶藏寺にて講演並に例會式法要修行す。
- 同 廿六日 蓮華寺御會式法要度修す晝夜説教あり。
- 同 廿七日 夜郡山教會所にて説教す。
- 同 廿八日 夜會津若松市妙法寺にて講演す。



次 目

阿含の人身觀	(中之一)	本多
開目鈔講話	(第五講)	小林一郎
詩		成島龍北・山根青村
年初に當り立正安國の精神を憶ふ		井上一次
國士を以て任せよ		三浦精一
南洲の遺訓		小林一
心の固きに由て神の護り強し		佐藤一
同師人の覺悟		和賀義見
記事		

○本部團報 ○地方教信
○團費誌料寄附維持費收領